松本市文化財調査報告　No.157

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡VIII

―緊急発掘調査報告書―

2000.3

松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡VIII

―― 緊急発掘調査報告書 ――

2000.3

松本市教育委員会

序

出川南遺跡は松本市の南部、芳野地区一帯に所在する遺跡です。本遺跡は以前から埋蔵文化財の包蔵地として知られており、昭和61年に初めての発掘調査が行われて以来、今回で8箇所目の調査となります。

このたび当地に県営住宅南松本団地の建替え工事が計画されたため、松本市が長野県から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成11年7月から11月にかけて行われました。作業は天候にもめぐまれ、関係者の皆様の御尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての生活跡を発見することができました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変役に立つ資料になることと思われます。

しかしながら、開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査に多大な御理解と御協力をいただいた長野県住宅部の皆様、県営住宅南松本団地をはじめ地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

松本市教育委員会　教育長　　竹　淵　公　章

例　言

1　本書は、平成11年７月26日～11月30日に実施された松本市芳野に所在する出川南遺跡第８次調査の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は長野県による県営住宅南松本団地改築事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。

3　本書の執筆は、Ⅰ：事務局、その他を田多井用章が行った。

4　本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄：百瀬二三子

遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内澤紀代子、洞沢文江

遺構図整理：石合英子、田多井用章

遺物実測：菊池直哉、竹内直美、竹平悦子、田多井用章、洞沢文江、松尾明恵

トレース・版組：櫻井了、田多井用章、洞沢文江

写真撮影：櫻井了、田多井用章（遺構写真）、宮嶋洋一（遺物写真）

総括・編集：田多井用章

5　本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P

6　図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。

7　遺構・遺物の記述中で用いた時期区分や遺物の分類、用語等は、古墳時代中期は下記文献１に、古墳時代後期は文献２に、古代は文献３にそれぞれ拠った。

文献１　冨沢一明ほか　1999　「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高杯の出現から消滅までの予察－」『東国土器研究』第５号

文献２　松本市教育委員会　1994　『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』

文献３　小平和夫　1990　「第５節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内１－総論編』㈶長野県埋蔵文化財センター

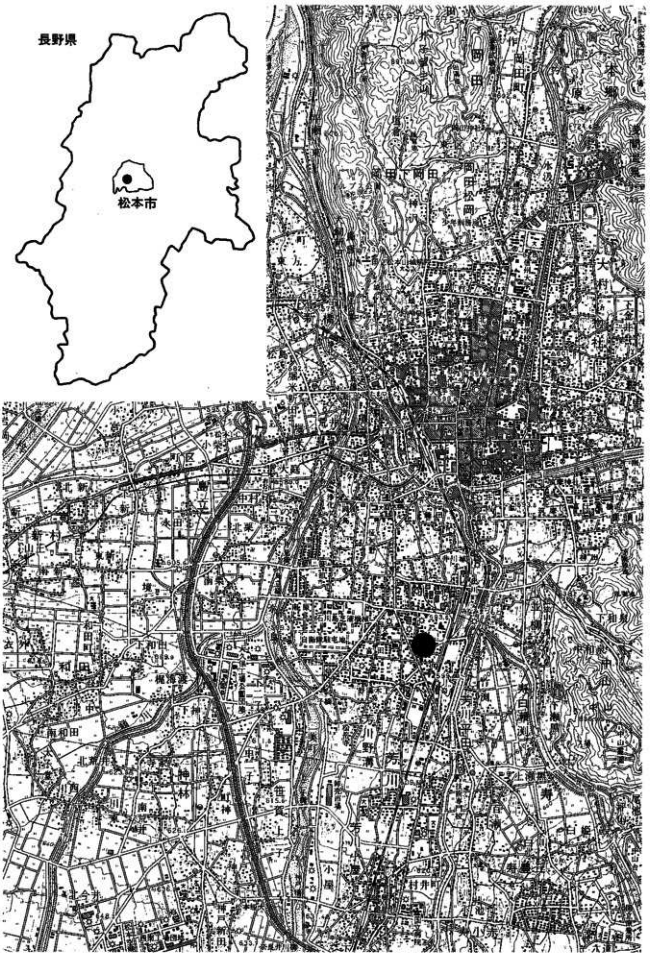
8　本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1　TEL 0263-86-4710　FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目　次

序
例　言
目　次

Ⅰ　調査の経緯
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査体制 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境
1．遺跡の環境 …… 2
2．過去の調査の概要 …… 3
Ⅲ　調査の概要 …… 4
Ⅳ　遺構
1．竪穴住居址 …… 5
(1)　古墳時代後期の住居址 …… 5
(2)　奈良・平安時代の住居址 …… 6
(3)　その他の住居址 …… 9
2．遺物集中出土地点 …… 11
3．掘立柱建物址 …… 11
4．土坑 …… 11
5．溝址 …… 12
6．自然流路 …… 12
Ⅴ　遺物
1．土器・陶器 …… 17
(1)　古墳時代中期の土器 …… 17
(2)　古墳時代後期の土器・陶器 …… 17
(3)　奈良～平安時代の土器・陶器 …… 18
2．鉄器 …… 21
Ⅵ　調査のまとめ …… 31

写真図版
報告書抄録



第１図　調査地点の位置（１：50000）

Ⅰ．調査の経緯

1．調査に至る経過

出川南遺跡は、松本市街地の南部、芳野地区に位置する遺跡である。昭和61年に第１次発掘調査が行われて以来、これまで12次にわたる調査が実施されている。今回報告する第８次調査は、長野県住宅部による県営住宅南松本団地建替え事業に伴って実施されたものである。今回の県営住宅建替え事業地は、周知の遺跡である出川南遺跡の範囲に該当しており、事業地の南に隣接する市営住宅建替えの際にも緊急発掘調査を実施した（第７次調査）ことから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。このため事業者である長野県住宅部と埋蔵文化財の保護について協議を行い、発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成11年５月18日付けで発掘調査業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は平成11年７月26日～同年11月30日まで行われた。発掘調査終了後は、引き続き考古博物館において、整理作業および本報告書の作成を行った。

2．調査体制

調査団長　竹淵公章（松本市教育長）

調査副団長　降旗富雄（松本市教育次長）

調査担当者　田多井用章（文化課主事）、櫻井了（同嘱託）

調査員　松尾明恵、宮嶋洋一

協力者　青木雅志、浅井信興、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、石川光男、今井太成、今村克、臼井秀明、内澤紀代子、遠藤亜矢子、大久保実蔵、太田万喜子、大月八十喜、岡村福太郎、岡村行夫、隠岐茂代、開嶋八重子、上條信彦、神田栄次、菊池直哉、久保田登子、窪田瑞恵、河野清司、小松正子、芝田とり子、清水陽子、下条ちか子、鈴木幸子、鷲見昇司、髙橋昭雄、高橋登喜男、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、寺嶋実、中上昇一、中村恵子、中村安雄、中谷高志、中山自子、新津由紀子、畑茂、林和子、林武佐、深沢賀子、福島勝、藤井道明、藤本利子、二木一男、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、真々部まさ子、待井敏夫、丸山喜和子、丸山惠子、道浦久美子、宮田美智子、村山牧枝、甕國成、百瀬二三子、山崎照友、横山清、米山禎興

事務局　松本市教育委員会文化課

木下雅文（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、酒井まゆみ（嘱託）

II 遺跡の位置と環境

1．遺跡の環境

今回の調査地点は松本市芳野10番地にあり、現在は県営住宅南松本団地の敷地内となっている。この周辺一帯は第２次世界大戦前後までは畑地として利用された。昭和30年代には県営住宅及びこれに隣接する市営住宅が建設され、宅地化された。現在は商業地及び宅地として市街化の著しい地区である。

調査地点の標高は597m前後で、東には田川、西には奈良井川が位置しており、現河床までの距離はそれぞれ650m、1600mである。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に位置している。調査地点の基本的な土層の堆積状況は第６図の通りである。基本土層Ⅲ層下には暗褐色粘質土層、暗灰色礫層が堆積していた。この礫層は今回の調査地点から第２次調査地点に渡って分布しているようである。この礫層は、硬砂岩が主体を占め、粘板岩及びチャートがこれに混じり、奈良井川系の堆積によるものと考えられる。この上に乗る粘質土及びシルト質土はこうした基盤土から雨水・小流によって洗い出され堆積したものである。

出川南遺跡周辺の遺跡分布を第２図に示した。これらの遺跡は、田川右岸の遺跡群、田川と奈良井川に挟まれた地域の遺跡群、奈良井川左岸の遺跡群の３群に大きく分けることができる。

田川右岸の遺跡群（22～26）は、中世以前は基本的には洪水を受けない安定した場所に立地する。ただ、近世以降東側の牛伏川がしばしば氾濫しており、現在把握できる遺跡の分布はこの氾濫による破壊を免れたもののみである。縄文時代には、山よりの小池遺跡で中期の大規模な集落が確認されているほか、百瀬遺跡で縄文土器と若干の土坑が確認されている。その後弥生時代後期には、弥生土器の百瀬式の標識遺跡として著名な百瀬遺跡のほか、竹渕遺跡・竹渕南原遺跡で規模の大きい集落が営まれる。この後中世に至るまで断続的ながらこの一帯に集落が形成されていることがこれまでの発掘調査により明らかにされており、百瀬遺跡・向原遺跡・竹渕遺跡・竹渕南原遺跡で古墳時代から中世にわたる集落址の調査が行われている。

田川と奈良井川に挟まれた一帯の遺跡群（６～21）は両河川の扇状地末端に位置しており、沖積地上に形成された遺跡である。出川南遺跡もこの一群に含まれる。この遺跡群の初源は弥生時代中期後半にさかのぼり、出川西・平田北両遺跡で該期の遺物・遺構が確認されている。この後若干の断絶を挟み、また地点を変えながらも、この一帯に古墳時代から平安時代にかけて集落が営まれている。古墳時代後期には出川南遺跡で、奈良時代から平安時代前期にかけては出川南遺跡及び平田北遺跡で、規模の大きな集落が営まれたことがこれまでの発掘調査により明らかになっている。10世紀代には、松本平の他の地域同様、集落ははっきりと確認することができない。平安時代後期から中世にかけては平田本郷・小原・吉田川西遺跡など、南側の地域で大規模な集落が確認されている。

奈良井川西岸の遺跡群（27～30）は、奈良井川の河岸段丘上に位置する。初源は縄文時代にさかのぼるが、いずれも散発的で、その後に継続するものではない。この一帯に本格的に集落が営まれるようになるのは７世紀後半からで、下神・南栗・北栗遺跡などで奈良時代～平安時代前期にかけての大規模な集落が急速に営まれるようになる。この一帯は河岸段丘上に位置することから、利水の悪い地域で、開発には水路の整備が不可欠であり、計画的で大規模な開発によりこうした集落の成立が可能になったものであろう。10世紀後半には、これら集落は急速に衰えるが、11世紀以降中世にかけて再度開発が行われ、集落が立地するようになる。

2．過去の調査の概要

出川南遺跡では開発行為に先立つ発掘調査が12次にわたり実施されている。各調査地点の位置を第３・４図に、調査成果の概要を第１表に示した。各地点は遺跡の東側・南側・北側の３群に分けることができる。

東側の調査地点として第１・６・11次調査地点がある。地質学的な所見によれば、この一帯は田川の形成した基盤上に乗っているようである。弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代前期・後期の集落が確認されている。いずれの調査地点も遺構面が２枚あり、上が古墳時代後期以降、下が弥生時代後期～古墳時代前期である。その他の調査地点では基本的に遺構面は１枚であり、田川が形成した地形上に乗っていることと合わせ、遺跡の形成過程が西側とは若干異なるようである。

南側の調査地点は今回の調査地点を含む。第４次調査地点内では、中期古墳である平田里１～３号古墳を調査した。古墳時代後期から平安時代前期が中心となり、比較的規模の大きい集落が確認されている。この時期の間は地点を若干変えながらも継続して集落が営まれたようで、特に古墳時代後期の集落は第４次調査地点でその様相がかなり明らかになった。近年の調査により、奈良時代～平安時代前期の集落の存在、またその内容もかなり把握することができるようになった。第４次調査地点からその南側には古墳時代後期の集落が見られ、その後奈良時代の集落が５・７・８・12次調査地点にかけて広がる。出川南遺跡の南にある平田北遺跡でも該期集落が確認されており、密接な関係があったものと思われる。平安時代前期の集落は５・７次調査地点および８・12次調査地点の東側にかけて分布する。確認できる範囲では奈良時代の集落より規模が小さくなるように見える。10世紀以降の遺構はこれまでのところ明確には確認できていない。

北側の調査地点として第９次調査地点があるが、ここでは古墳時代前期及び後期の集落を確認した。出川南遺跡の北側に位置する出川西遺跡では弥生時代中期後半から後期の集落が確認されていること、またJR篠ノ井線の南松本駅周辺では古墳時代前期の遺物の出土が伝えられており、出川南遺跡の北側から出川西遺跡にかけての一帯に弥生時代後期から古墳時代前期の集落が展開していたことが想像できる。本遺跡東側に位置する前期古墳の弘法山古墳との関わりが注目される。

第１表　過去の調査一覧

調査次	実施年度	面積	調査成果	備考
Ⅰ	昭和61年（1986）	1,325㎡	住居址5（弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期1） 竪穴状遺構1、土坑1、掘立柱建物址1、溝4	遺構面２枚　上が平安、下が弥生後期～古墳前期
Ⅱ	昭和63年（1988）	1,715㎡	住居址1（古墳後期） 土坑26、ピット61、溝1	
Ⅲ	平成元年（1989）	900㎡	住居址6（古墳後期～平安前期）	
Ⅳ	平成３年（1991）	14,688㎡	住居址116（古墳後期113、平安前期2、平安後期1） 掘立柱建物址31、溝11、土坑7、柱列2、ピット多数	平田里１～３号古墳（中期古墳）も調査
Ⅴ	平成10年（1998）	281㎡	住居址11（古墳後期1、奈良1、平安前期5） 土坑6、ピット11	
Ⅵ	平成10年（1998）	1,486㎡	住居址4（弥生後期前半3、古墳後期1） 竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、溝6、土坑3、ピット55	遺構面２枚　上が古墳後期以降、下が弥生後期
Ⅶ	平成10年（1998）	867㎡	住居址50（古墳後期～奈良11、平安前期39） 掘立柱建物址1、溝2、土坑175、ピット13、遺物集中2	
Ⅷ	平成11年（1999）	3,467㎡	住居址48（古墳後期7、奈良～平安前期23）、掘立柱建物址1、土坑144、溝1、遺物集中（古墳中期）2、自然流路2	
Ⅸ	平成11年（1999）	240㎡	住居址2（古墳後期） 遺物集中出土地点2（古墳前期）、土坑4、ピット7	
Ⅹ	平成11年（1999）	560㎡	住居址4（平安前期） 溝1、ピット5	
Ⅺ	平成13年（2001）	188㎡	住居址3（平安後期2、弥生後期1） 溝1、土坑7、ピット234	
Ⅻ	平成13年（2001）	2,197㎡	住居址13（古墳後期1、奈良10、平安2）、土坑34、ピット70	

Ⅲ 調査の概要

今回の調査地点は平成10年度に実施した第７次調査地点に隣接していたため、開発事業者である長野県住宅部との保護協議結果をふまえ、事業地全体を対象範囲とした。事業地は昭和30年代に県営住宅南松本団地が建設されていたところであったため、建物基礎や配管等の攪乱がかなり広く及んでいた。

調査に際しては重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により遺構検出・掘削作業を行った。建物基礎・配管等の攪乱がかなり及んでおり、概して遺構の残存状況は悪かった。また、第７次調査地点での所見から古墳時代後期～平安時代前期の遺構面の下層から古墳時代中期初頭の遺物が出土する可能性があったため、検出面を２枚設定し、第１検出面の調査終了後にさらに重機により掘削を行い、第２検出面の調査を行った。調査終了後は重機による埋め戻しを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の３m方眼を設定して行った。調査は排土処理のため何回かにわけて調査区を設定し、排土を反転しつつ行った。調査時にはＡ～Ｅの５つの調査区を設定したが、本報告書では第５図のように大きく西区と東区の２地区にわけて記述を行う。東区が調査時のＡ区からＣ区、西区がＤ・Ｅ区に対応する。

調査地点の基本的な土層構成は第６図の通りである。遺構はⅡ層から掘り込まれていた可能性が高いが、土層中に鉄分を多量に含み、検出が困難であったため、検出面はⅢ層の上面付近とした。検出面の深さは現地表から80cm程度下がったあたりとなった。遺構覆土は地山より若干黒みが強いが色調が近似しており、検出時にはプランはそれほど明確に把握できなかった。第２検出面はⅢ層下層の暗褐色粘質土中とした。第２検出面からは古墳時代中期初頭の遺物がややまとまって出土する地点を２箇所確認することができ、遺物集中地点として調査した。

調査により、古墳時代後期～平安時代前期の住居址を始めとする遺構が確認され、該期の遺物も出土した。古墳時代中期の遺物集中出土地点では、遺物に伴う掘り方を確認することができず、明確な遺構として把握することはできなかった。先述のように、調査地点はかなりの範囲で攪乱が及んでおり、集落の構造等を明らかにできるような成果は得られなかったが、各時期の遺構のあり方やおおよその分布状況等は把握することが可能である。また、今回の調査区は東西に長いものであったので、出川南遺跡の南西範囲の状況をある程度明らかにすることができたものと思われる。

調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間　平成11年７月26日～平成11年11月30日

調査面積　3,467㎡

検出遺構

竪穴住居址	48軒
遺物集中出土地点	２地点
掘立柱建物址	１棟
溝	１条
土　坑	144基
自然流路	２条

出土遺物　土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器）・鉄器

Ⅳ 遺構

1．竪穴住居址

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代前期の住居址48軒を確認した。古墳時代後期が７軒、奈良・平安時代が23軒、時期不明のものが18軒を数える。遺構検出段階では102軒の住居址を設定し、掘削したがプラン・立ち上がりがはっきりとせず、遺物が全く出土しないなど、住居址とするのに適当でないものがあり、これらは欠番扱いとした。欠番としたものは54軒を数える。遺構番号は、第６・７次調査からの連番で振り、154住～200住、253住～307住までを振った。以下、時期ごとに概観する。

(1) 古墳時代後期の住居址

第157号住居址

覆土は２層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色土で床とした。床面でピットを３基確認したが、柱穴は不明。カマドは西壁中央に設けられている。煙道が発達した形態のもので、袖石と袖を構成したと思われる礫が確認できた。火床は赤化していたが、それほど顕著ではない。遺物はカマド周辺の床面を中心に出土している。出土遺物から出川南第２段階に帰属する。

第191号住居址

遺構の大半が攪乱にあい、西側を190住に切られているため残存状況は非常に悪い。覆土は３層からなり、壁は斜めに立ち上がる。貼床は確認できず、地山の暗褐色砂質土で床としたが、明瞭ではない。北壁に焼土の分布が確認でき、これがカマドの火床であると思われる。この周辺には床面上に礫群の分布が確認できた。遺物はカマド火床周辺を中心に出土している。出土遺物から出川南第４段階に帰属する。

第192号住居址

覆土は４層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。地山の暗褐色粘質土で床としたが、硬く締まっていた。カマドは西壁中央よりやや南側に設けられており、粘土による袖が確認できた。この袖は火床上に一部オーバーハングしており、天井部の一部であろう。火床中央には支脚石が残存していた。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを２基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド付近を中心とした床面を中心に出土している。出土遺物から出川南第３～４段階に帰属する。

第193号住居址

覆土は３層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土で床とした。カマドは確認されなかったが、東壁付近に焼土の分布が確認でき、これが火床であった可能性はある。床面でピットを４基確認したが、柱穴は不明。遺物は床面付近を中心に出土している。出土遺物から出川南第４段階に帰属する。

第290号住居址

覆土は２層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。遺構のかなりの部分が攪乱を受けており、残存状況は悪い。貼床は確認されず、地山の暗褐色砂質土で床とした。カマドは確認されず、床面でピットを３基確認したが柱穴は不明である。遺物は覆土中より出土している。出土遺物から出川南第１～２段階に帰属する。

第297号住居址

本址出土土器・陶器には、古墳時代後期のものと平安時代のものとがあり、ともに量的にもまとまっていることから、本来は両時期の遺構が重複していたものと思われる。遺構検出時及び掘削時には判別がつかず、一緒に掘削を行ってしまった。本址床面からは古墳時代後期の遺物が出土しており、床面に高低も認められ

ないことから、古墳時代の住居址を平安時代の遺構が貼っていたものと思われる。平安時代の遺物の平面的な分布は本址全体にわたっており、ある程度の面積を持っていた遺構と思われる。掘削時には本址のプラン・壁の立ち上がりは比較的明瞭に把握でき、掘削時のプランを以て古墳時代の住居址のプランとする。

掘削時に把握した覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。床はカマド周辺に硬い粘質土の分布が見られ、貼床と思われるが、これ以外の部分ははっきりとせず、地山の暗褐色砂質土で床とした。カマドは東壁ほぼ中央に設けられ、粘土による袖が確認できた。この粘土による袖は、両袖とも芯材として完形もしくはこれに近い土師器甕を用いており、出土時は甕の底部付近が露出した状態であった。火床は赤化していたが、それほど顕著ではない。床面でピットを5基確認し、柱痕は確認できなかったが、位置的にはＰ４・５が柱穴であった可能性がある。遺物は覆土中及びカマド周辺を中心とした床面から多く出土している。平安時代の注目すべき遺物として、五芒星と思われる墨書のある土師器が出土している。出土遺物の年代は古墳時代後期が出川南第４段階、平安時代が７期に帰属する。本址の帰属時期は古墳時代後期出川南第４段階である。

(2) 奈良・平安時代の住居址

第154号住居址

覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土で床とした。床面でピットを９基確認したが柱穴は不明。カマドは西壁中央に設けられていたが、袖は残存しておらず、顕著に赤化した火床を確認したにとどまった。遺物はカマド周辺の床面を中心にしている。また、覆土上半からは直径20cm程度の投棄されたと思われる礫が散漫に出土している。出土遺物から６期に帰属する。

第158号住居址

覆土は５層で、壁は垂直に近く立ち上がる。床までの深さは40cm程度で残存状況は良好であった。床は暗黄褐色粘質土による貼床がほぼ全面で確認できた。床面でピットを５基確認したが、柱穴は不明。南西隅の壁沿いには周溝が確認できた。カマドは東壁中央やや北寄りに設けられる。黄褐色粘土による袖が残存しており、煙道は発達している。火床は顕著に赤化していた。遺物はカマド周辺を中心とした床面から出土しており、特に遺構東半に多く分布していた。遺物の出土量は非常に多い。出土遺物から２期に帰属する。

第163号住居址

遺構の大半が攪乱を受けており、残存状況は非常に悪い。覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色砂質土で床とした。カマド及び床面のピットは確認できなかった。遺物は床面付近を中心に出土している。出土遺物から７期に帰属する。

第164号住居址

遺構の大半が攪乱を受けており、残存状況は非常に悪い。覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色砂質土で床としたが、明瞭ではない。カマド・床面のピットは確認できなかった。遺物は床面付近から出土し、残存状況が悪い割には出土量は多い。出土遺物から８期に帰属する。

第165号住居址

遺構の大半が攪乱を受け、南半は調査区外にかかるため、残存状況は非常に悪い。覆土は単層で、壁はやや斜めに立ち上がる。カマド及び床面のピットは確認できなかった。遺物は床面付近から出土している。帰属時期の詳細は不明だが、８期前後に位置づけられよう。

第168号住居址

覆土は２層からなり、壁はやや斜めに立ち上がる。貼床は確認されず、地山のやや粘質の暗褐色土で床とした。カマドは確認されなかった。床面でピットを３基確認したが、柱穴は不明。遺物は覆土中より出土し、特に遺構南半からの出土が多かった。出土遺物から７期に帰属する。

第176号住居址

176・184号住居址は遺構検出時は1軒の住居址として把握していた。掘削を行ったところ、北西側で貼床が確認された。他の床面はこの貼床より低い位置に確認されたため、2軒の住居址の切合いであることが判明したものである。貼床を持つ新しい住居址を184住、これに貼られる住居址を176住とした。184住のプランは掘削を行ってしまったため把握できなかった。このため、整理作業段階で貼床の範囲及び遺物の分布状況から184住の範囲を想定し、点線で示してある。

176住覆土は図示していないが暗褐色土で、壁は垂直に近く立ち上がる。床面でピットを2基確認したが柱穴は不明。遺物は覆土中より出土している。帰属時期は1～2期である。

第178号住居址

遺構の大半が攪乱を受け、北側は調査区外にかかり、残存状況は非常に悪い。覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、暗褐色砂質土で床とした。東壁に焼土の分布が確認でき、カマド火床と思われる。火床は赤化していたが、顕著ではない。床面でピットを1基確認したが、柱穴は不明。遺物は床面付近から少量出土している。出土遺物から5期前後に帰属するものと思われる。

第179号住居址

覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。貼床は確認されなかったが、硬く締まった暗褐色土で床とした。カマドは東壁中央に設けられていたが、袖は残存しておらず、火床を確認したにとどまった。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを6基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド周辺及び床面を中心に出土した。出土遺物から5期に帰属する。

第180号住居址

覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は暗黄褐色粘質土による貼床が確認できた。カマドは東壁中央に設けられていたが、火床を確認したにとどまった。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを5基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド周辺を中心に出土している。出土遺物から7期に帰属する。

第184号住居址

先述のように掘削時に176住との重複関係を誤認したため、遺構の詳細を把握することはできなかった。床は黄褐色粘質土による貼床が確認できた。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。北西隅床面付近からは直径20～30cm程度の礫がまとまって出土しており、この周辺には覆土中に焼土が中量混入していた。遺物は床面付近を中心に出土している。7期前後に帰属する。

第190号住居址

遺構の大半が攪乱を受け、北側は調査区外にかかり、残存状況は悪い。貼床は確認されず、地山の暗褐色土で床とした。覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。カマドは確認できなかった。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。遺物は覆土中を中心に出土している。出土遺物から7～8期に帰属する。

第253号住居址

遺構の大半が179住に張られ、残存状態は悪い。覆土は2層からなり、壁はやや斜めに立ち上がる。カマドは西壁に確認できたが袖は残存しておらず、火床を確認したにとどまった。火床は顕著に赤化していた。遺物はカマド周辺及び床面から出土している。出土遺物から古墳時代後期～2期に帰属する。

第263号住居址

覆土は4層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は暗黄褐色粘質土による貼床が確認できた。カマドは西壁に設けられており、火床と煙道を確認した。火床の赤化は顕著ではない。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド周辺及び覆土中から出土している。出土遺物から1～2期に帰属する。

第277号住居址

覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は暗黄褐色粘質土による貼床がほぼ全面で確認できた。カマドは西壁に設けられており、袖は残存していなかったが、顕著に赤化した火床を確認した。床面でピットを9基確認したが、ピット1～7はいずれも覆土中に焼土を多量に含んでいた。また、ピット2・4からは土器片がまとまって出土した。北壁沿いには周溝が確認できた。遺物はカマド周辺及び床面、ピット内から非常に多く出土している。遺物の年代から2期に帰属するものである。

第281号住居址

遺構の大半が調査区外にかかり、282住に貼られているため、詳細は不明。覆土は2層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。床面でピットを4基確認した。遺物は覆土中より出土している。出土遺物から2～4期に帰属するものである。

第282号住居址

覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土で床面とした。カマドは西壁に設けられ、袖石が残存していた。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド周辺を中心とした床面を中心に出土している。2～4期に帰属する。

第285号住居址

覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土で床とした。カマドは西壁中央南寄りに設けられており、袖は残存していなかった。火床掘り方ははっきりとしなかったが、赤化していた。床面でピットを4基確認したが柱穴は不明。遺物はカマド周辺を中心に出土している。出土遺物から5～6期に帰属する。

第286号住居址

西区は南北2回に分けて調査を行い、その境が154住と本址の間にあったため、両者の関係を調査時に把握することができなかった。このため、本址のプラン北半は把握することができなかった。覆土は2層で、壁は斜めに立ち上がる。本址北側の154住からは本址出土のものと同時期と思われる遺物が出土しており、これらは本址に帰属するものである可能性が高い。床は地山の暗褐色砂質土とした。帰属時期は1～3期である。

第291号住居址

覆土は3層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。床は貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土とした。カマドは西壁に設けられ、袖石が残存していた。火床は顕著に赤化する。床面でピットを3基確認したが、柱穴は不明。遺物はカマド周辺を中心に出土している。出土遺物から6～7期に帰属する。

第292号住居址

覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は貼床は確認されず、地山の暗褐色粘質土としたが、硬く締まっていた。カマドは西壁に設けられ、顕著に赤化した火床と袖石と思われる礫が確認できた。遺物は床面付近を中心に出土している。出土遺物から6～7期に帰属する。

第298号住居址

攪乱をかなり受けており、遺構検出時にはプランを明瞭に確認することができなかった。掘削により東壁が当初想定していたものより西側によることが判明した。点線で図示した東壁プランは土層断面で確認した東壁の位置から想定したものである。南壁は把握できなかった。覆土は5層からなり、壁は斜めに立ち上がる。地山の暗褐色粘質土で床とした。カマドは西壁に設けられ、粘土と礫による袖の一部が確認できた。火床は顕著に赤化していた。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。遺物は床面を中心に出土している。出土した遺物の年代には古墳時代後期のものと平安時代のものとがあるが、出土状況から本址に伴うのは平安時代のものと思われる。古墳時代の遺物は遺構南半から出土する傾向があり、量的にもある程度まとまっ

て出土していることから、304住の範囲を一緒に掘削してしまったものと思われる。遺構検出時・掘削時には判別がつかなかった。本址の帰属時期は7期である。

(3) その他の住居址

ここでは帰属時期の不明なものを扱う。

第155号住居址

覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。遺構検出時には比較的明瞭にプランを把握することができた。床は地山の暗褐色砂質土とした。遺物の出土量は皆無であった。

第156号住居址

覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色砂質土とした。遺物は覆土中より少量出土したのみである。

第160号住居址

覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。床面でピットを1基確認した。遺物は覆土中及びピット内から少量出土した。

第166号住居址

覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色砂質土で床とした。カマドは確認できなかったが、北東隅床面には焼土の分布が確認できた。床面でピットを2基確認したが、柱穴は不明。遺物は北東隅の焼土範囲付近を中心に出土しているが、量は少ない。帰属時期は判然としない。

第167号住居址

覆土は2層からなり、壁はやや斜めに立ち上がる。遺構の大半が調査区外にかかり、詳細は不明。遺物は覆土中から少量出土している。帰属時期は、出土土器に定型化後の土師器甕Bがあり、平安時代には帰属するものと思われるが、詳細は不明である。

第170号住居址

本址は、遺構上面と西半が攪乱を受けており、残存状況は非常に悪く、かろうじて床面付近が残存し、調査区北壁で土層断面を観察することができたのみであった。土層断面でカマドと思われる焼土の分布も確認できたため、住居址であることが把握できた。覆土は3層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。平面的に掘削できた範囲では床までの深さは10cm前後であった。カマドは土層断面で火床と思われる焼土を西壁で確認できたが、平面的には確認できなかった。床面でピットを1基確認したが、柱穴は確認できなかった。遺物は覆土中からわずかに出土しているのみで、帰属時期は不明である。

第173号住居址

遺構の大半が攪乱にあい、北側は調査区外にかかるため、詳細は不明。遺構検出時にはプランは比較的明瞭に確認することができた。覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土とした。遺物は少量出土したのみである。

第174号住居址

覆土は3層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床面でピットを3基確認した。床は地山の暗褐色粘質土とした。遺物は覆土中より少量出土しており、美濃須衛窯産の須恵器甕や土師器甕Aがあり、奈良時代に帰属する可能性が高い。

第187号住居址

遺構上面の大半を削平され、残存状況は非常に悪く、床までの深さは10センチに満たない。覆土は2層で、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土とした。カマドは西壁ほぼ中央に設けられていたが、火床

を確認したにとどまった。遺物は少量出土したのみで帰属時期は不明である。

第197号住居址

遺構検出時には比較的明瞭にプランを把握することができた。覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土とした。遺物は少量出土したのみで、図示しうるものはないが、定型化した土師器甕Bがあり、平安時代に帰属する可能性が高い。

第287号住居址

遺構の大半が攪乱を受け、北側は調査区外にかかり、残存状況は悪い。覆土は2層からなり、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土とした。遺物は覆土中から少量出土しており、図示できたものはないが、須恵器杯蓋A・杯Aが出土しており、奈良時代に帰属するものであろうか。

第288号住居址

覆土は3層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。貼床は確認されず、地山の暗褐色砂質土で床とした。カマドは確認できなかった。床面のピットは1基を確認したのみ。遺物は覆土中より散漫に出土している。帰属時期は、出土遺物が少ないため、古墳時代後期に帰属するという以外は不明である。

第296号住居址

遺構の大半が攪乱を受けており、詳細は不明。東側は297住と関わるものと思われるが、遺構検出時には本址のプランは攪乱東側に確認することはできず、本址が297住に切られているものと判断した。南西隅には床面上に礫群の分布が確認できた。遺物は覆土中より少量出土したのみで、帰属時期は不明。

第299号住居址

遺構の大半が他の遺構に切られ、調査区外にかかるため、詳細は不明。覆土は単層で、壁は斜めに立ち上がる。床面でピットを1基確認し、遺物はこのピット内から出土している。

第300号住居址

北半が調査区外にかかるが、規模が小さく住居址として扱うのは適当でないかもしれない。掘り方は掘削時にある程度明瞭に把握することができた。遺物は覆土中より少量出土している。

第301号住居址

覆土は2層で、壁は斜めに立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土としたが、はっきりしなかった。床面でピットを3基確認し、このうちピット2・3覆土中には焼土が含まれていた。遺物は覆土中から出土し、古墳時代後期のものと平安時代後期のものとがあるが、両者の分布状況のあり方を把握することができなかった。このため本址の帰属時期も不明である。

第302号住居址

覆土は2層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。北半は調査区外にかかり、詳細は不明。床は地山の暗褐色粘質土とした。遺物は覆土中より散漫に出土しているのみで、帰属時期は不明である。

第303号住居址

覆土は単層で、壁は垂直に近く立ち上がる。東壁は攪乱にあっているためか把握できなかった。床は暗褐色粘質土とした。北側の床面では焼土の分布が確認できた。遺物は床面付近を中心に少量出土したのみで、図示しうるものはなかったが、土師器甕Aが出土している。帰属時期は不明である。

第304号住居址

遺構の大半が298住に切られる。先述のように、298住掘削時に304住の範囲を判別がつかず掘削してしまった可能性が高い。本址西側のプランは比較的明瞭に把握することができた。304住として掘削した範囲からは遺物が出土しておらず、帰属時期も不明であるが、298住出土として取り上げた古墳時代後期の遺物が本址に帰属するとすれば、本址もこの時期に帰属することになる。

第307号住居址

遺構の大半が他の遺構に切られたり、攪乱を受けており、残存状況は悪い。覆土は2層からなり、壁は垂直に近く立ち上がる。床は地山の暗褐色粘質土とした。床面でピットを2基確認した。遺物は床面付近を中心に出土している。帰属時期の詳細は不明だが、奈良時代のものであろう。

2．遺物集中出土地点

今回の調査では、古墳時代中期の遺物集中出土地点を2箇所確認した。ともに掘り方ははっきりと把握できず、明確な遺構として把握することはできなかった。出土した遺物はいずれも残存度が高く、完形もしくはそれに近いものも見られた。今回確認したような該期の遺物集中出土地点は今回の調査地点の西側に隣接する第7次調査地点でも確認されており、近隣に該期集落があった可能性を示していよう。

遺物集中出土地点1

東区南側、E84S36周辺の第2検出面で確認された。完形もしくはそれに近い土器が2点出土している。土器は第2検出面の検出時に確認されたもので、この周辺の掘り下げも行ったが、平面的にも、土層断面でも掘り方を確認することはできなかった。遺物が出土した土層は基本土層Ⅲ層とした暗褐色土下層の暗褐色粘質土であった。

遺物集中出土地点2

西区南側、E3S3周辺で確認された。この一帯は、旧県営住宅に付随する埋設管があったため、土層が強くグライ化しており、色調による遺構の把握は非常に困難であった。当初、遺構検出時に住居址があるものと考え、掘削を行った。結果的には、土壌のグライ化もあり、遺構掘り方は判然とせず、明確な遺構として把握することができなかったが、該期の遺物がまとまって出土した。ただ、遺物の出土範囲は、検出時に想定した遺構のプランとは合致しない。遺物はいずれも残存度の高いもので、完形に近いものも見られた。土器の周辺には拳大程度の礫の分布が確認できた。遺物の出土した土層は集中出土地点1と同様の暗褐色粘質土で、土器や礫周辺の土層には焼土が含まれていた。

3．掘立柱建物址

1棟を確認した。2間×3間の側柱式建物址で、規模は383cm×550cmを計る。各柱穴は遺構検出時には明瞭にプランを把握することができたが、柱痕は上面では把握できず、土層断面で確認した。主軸方向はN-81°-Wで、ほぼ東西方向である。柱穴の平面形は不整円形もしくは隅丸長方形で、規模は78～96cm×82～115cmである。柱痕の直径は20cm前後で、検出面からの深さは30～60cm程度である。出土遺物は少なく、明確な帰属時期は不明だが、平安時代に帰属するものと思われる。

4．土坑

今回の調査では穴を全て土坑として扱った。総数144基を数える。直径が50cm以上のものを図示した。平面形態は円形・楕円形を呈するものがほとんどである。出土遺物から帰属時期のわかるものとして、古墳時代後期に土159・227、奈良・平安時代に土171・192・218・222・223がある。帰属時期のわからないものについても、古墳時代後期から平安時代に帰属するものが多いものと推測できよう。

5．溝址

1条を確認した。南北方向から若干東側へ振る溝で、遺構検出時はプランを厳密にとらえることが難しく、掘削を行いつつプランを決定した。断面形状は皿状を呈し、立ち上がりは緩やかである。覆土は2層からなり、流路性の堆積は認められない。南端ではⅠ層中から礫がややまとまって出土した。遺物は大半がこの礫分布範囲から出土しており、量は少ない。帰属時期の詳細は不明である。

6．自然流路

東区で2条を確認した。ともに覆土は拳大程度までの礫層で、北東方向の流路である。掘削をしていないため詳細は不明だが、南西から北東方向に流れたものであろう。自然流路1は幅約20mを測る。自然流路2の右岸は調査区外のため幅は不明だが、東隣の第10次調査において、検出面全体に広がっていた砂礫範囲とつながるものであれば、比較的大きな流路が想像できる。

第 2 表　竪穴住居址一覧

No.	平面形	規模（cm）				カマド形態	時期	備考
		長軸	短軸	深さ	床面積(m²)	主軸方向	種類・位置		
154	隅丸長方形	403	367	43	13.0	N-15°-E	西壁中央 石組みか	古代７期	286住を切る　攪乱にあう
155	隅丸長方形？	361	〈258〉	17	5.8	N-12°-E			攪乱にあう
156	隅丸長方形	401	338	18	9.4	N-9°-E			157住・160住・土58・63に切られる　攪乱にあう
157	隅丸長方形	482	298	30	13.3	N-10°-E	西壁中央 石組み	古墳後期 第２段階	
158	隅丸長方形	513	358	40	14.8	N-2°-E	東壁中央 粘土	古代２期	174住を切る　攪乱にあう
160	不明	〈284〉	〈94〉	26	3.1	N-6°-E			156住を切る　174住に切られる　攪乱にあう
163	不明	〈369〉	〈244〉	24	7.4	N-12°-E		古代７期	攪乱にあう　調査区外にかかる
164	不明	〈370〉	〈360〉	26	7.7	N-10°-E		古代８期	攪乱にあう
165	不明	338	〈117〉	19	2.9	N-8°-E		古代８期	攪乱にあう　調査区外にかかる
166	隅丸長方形	〈490〉	296	32	13.2	N-10°-E	東壁？		攪乱にあう　調査区外にかかる　自然流路１を切る
167	不明	〈248〉	〈109〉	53	1.5	N-10°-E		平安時代？	168住に切られる　調査区外にかかる
168	隅丸方形？	517	〈264〉	43	10.8	N-14°-E	東壁？	古代７期	167住を切る　調査区外にかかる　攪乱にあう
170	隅丸長方形？	〈400〉	〈249〉	20	6.4	N-8°-E	西壁？		攪乱にあう
173	不明	〈205〉	〈39〉	16	0.4	N-10°-E			174住を切る　攪乱にあう
174	隅丸長方形	508	〈454〉	36	12.0	N-9°-E		奈良時代？	160住を切る　158・173住に切られる　攪乱にあう
176	不明	〈649〉	〈291〉	37	12.4	N-12°E		古代1～2期	184住に貼られる　調査区外にかかる　攪乱にあう
178	不明	459	〈152〉	14	4.3	N-10°-E	東壁	古代５期	調査区外にかかる　攪乱にあう
179	隅丸方形	〈412〉	398	22	13.3	N-6°-E	東壁中央	古代５期	253住を貼る　攪乱にあう
180	隅丸方形	392	381	40	12.7	N-11°-E	東壁中央	古代７期	
184	不明	〈279〉	〈251〉	19	6.0	不明		古代７期	176住を貼る　調査区外にかかる　攪乱にあう
187	隅丸長方形	558	384	14	19.7	N-13°-E	西壁中央		攪乱にあう
190	不明	354	〈209〉	22	6.2	N-7°-E		古代7～8期	191住を切る　攪乱にあう
191	不明	〈285〉	〈118〉	17	3.0	N-10°-E	北壁	古墳後期 第４段階	190住に切られる　攪乱にあう
192	隅丸長方形	445	400	61	12.9	N-2°-E	西壁	古墳後期 第3～4段階	193住に切られる
193	隅丸方形	〈431〉	336	49	12.6	N-3°-E		古墳後期 第４段階	192住を切る　攪乱にあう
197	不明	379	〈178〉	33	5.3	N-12°-E		平安時代？	調査区外にかかる
253	隅丸長方形	〈444〉	398	23	16.1	N-2°-E	西壁	古墳後期 ～古代２期	179住に貼られる　攪乱にあう
263	隅丸方形？	394	〈312〉	30	9.4	N-25°-E	西壁	古代1～2期	攪乱にあう
277	隅丸方形？	571	〈342〉	34	17.1	N-2°-E	西壁	古代２期	土183に切られる　攪乱にあう　調査区外にかかる
281	不明	409	〈96〉	14	2.9	N-12°-E		古代2～4期	282住に貼られる　土186・211に切られる　調査区外にかかる
282	隅丸長方形？	495	〈387〉	28	16.9	N-12°-E	西壁中央か 石組み	古代2～4期	281住を貼る　土194・195・206・215に切られる　攪乱にあう　調査区外にかかる
285	隅丸方形？	367	〈231〉	29	6.7	N-0°-E	西壁	古代5～6期	土207を切る　土208・210に切られる　攪乱にあう
286	不明	〈302〉	〈239〉	29	5.7	N-4°-E		古代1～3期	154住に切られる　攪乱にあう
287	不明	〈302〉	〈168〉	34	3.8	N-5°-E		奈良時代？	296住を切る　調査区外にかかる　攪乱にあう
288	隅丸長方形？	〈282〉	〈144〉	53	3.4	N-5°-E		古墳後期	土217に切られる　攪乱にあう
290	不明	〈348〉	〈343〉	29	10.1	N-14°-E		古墳後期 第1～2段階	攪乱にあう
291	隅丸長方形	〈360〉	352	58	10.3	N-5°-E	西壁 石組み	古代6～7期	土222に切られる　調査区外にかかる
292	隅丸長方形？	382	〈334〉	38	9.9	N-16°-E	西壁 石組み	古代6～7期	土218に切られる　攪乱にあう

No.	平面形	規模（cm）					カマド形態	時期	備考
		長軸	短軸	深さ	床面積(m²)	主軸方向	種類・位置		
296	不明	〈143〉	〈140〉	26	1.7	N-2°-E			287・297住に切られる　攪乱にあう
297	隅丸長方形？	500	〈240〉	25	11.3	N-3°-E	東壁中央粘土	古墳後期第4段階	299住を切る　攪乱にあう
298	隅丸長方形	685	481	51	30.9	N-3°-E	西壁中央石組み	古代7期	307住を切る　攪乱にあう
299	不明	179	83	25	1.3	N-4°-E			297住に切られる　攪乱にあう　調査区外にかかる
300	不明	249	〈156〉	54	2.9	N-2°-E			調査区外にかかる
301	不明	〈427〉	〈390〉	48	12.3	N-3°-W			302・303・307住を切る　攪乱にあう　調査区外にかかる
302	不明	〈305〉	〈171〉	33	4.7	N-3°-E			303住を切る　301住に切られる　調査区外にかかる
303	不明	455	〈413〉	51	10.4	N-5°-W			307住を切る　301・302住に切られる　攪乱にあう
304	不明	〈278〉	〈85〉	14	1.8	N-8°-E			298住に切られる　自然流路2に切られる　攪乱にあう
307	不明	〈299〉	〈255〉	42	6.1	不明		奈良時代	298・301・303住に切られる　攪乱にあう

第3表　土坑一覧

土坑No.	区	図No.	平面形	規模（cm）長軸×短軸×深さ	時期	備考
51	D	D9	円形	65×64×38		
53	D	D1	円形	53×49×42	古墳～奈良	
54	D	D1	円形	52×49×19		
55	D	D1	円形	72×66×20		
56	D	D8	楕円	91×71×37		
57	D	D8	円形	89×81×28		
58	D	D2	不明	40×18×20		
59	D	D7	不明	116×44×41		調査区外にかかる
60	D	D7	円形	137×127×28		157住を切る　調査区外にかかる
61	D	D2	隅丸長方形	58×33×14		
63	D	D3	楕円形	70×56×24		
64	C	C9	円形	68×66×27		
65	C	C4	円形	60×54×29		
66	C	C4	円形	46×45×29		
69	C	C11	円形	92×82×32		
72	D	D13	楕円形	62×32×7		
73	D	D13	楕円形	39×30×6		
74	D	D13	円形	76×68×25		
76	D	D10	楕円形	49×(40)×35		攪乱にあう
77	B	B3	円形？	70×(26)×36		調査区外にかかる
78	B	B3	楕円形	124×94×12		
80	B	B11	円形	48×47×16		
81	B	B11	円形	29×27×11		
82	B	B11	円形	48×47×14		
83	B	B11	円形	67×62×9		
84	B	B11	円形	48×42×18		
85	B	B11	楕円形	47×26×5		
86	B	B11	円形	27×23×14		
87	B	B11	楕円形	52×42×15		
88	B	B11	円形	70×70×14		土89を切る
89	B	B11	楕円形	72×67×14		土88に切られる
90	B	B11	円形	63×60×14		土154を切る
91	B	B13	楕円形	61×39×18		
92	B	B13	楕円形	56×47×20		
93	B	B14	楕円形	63×50×23		
94	B	B14	楕円形？	57×(44)×21		
95	B	B16	楕円形	102×67×40		
96	B	B15	楕円形	74×53×23		
97	B	B15	楕円形	68×44×12		

土坑No.	区	図No.	平面形	規模（cm） 長軸×短軸×深さ	時期	備考
98	B	B15	円形	42×32×9		
99	B	B15	円形	32×30×6		
103	D	D10	円形	59×52×21		
104	D	D9	楕円形	77×63×21		
105	D	D9	円形	42×40×22		
106	E	E1	円形	(58)×(37)×13		調査区外にかかる
107	E	E1	楕円形	74×44×21		
108	E	E2	楕円形	55×(26)×18		調査区外にかかる
109	E	E2	円形	48×48×14		
110	E	E2	楕円形？	72×21×12		調査区外にかかる
111	E	E2	円形	52×47×19		
112	E	E2	円形	40×36×19		
113	E	E2	楕円形	51×44×24		
114	E	E6	楕円形	52×35×21		
115	E	E2	円形	35×32×10		
116	E	E7	円形	35×34×19		溝1を切る
117	E	E6	楕円形	73×49×30		
118	E	E3	円形	52×45×13		
120	E	E6	円形	43×37×14		
121	E	E6	円形	29×27×15		溝1を切る
122	E	E6	円形	29×24×16		
123	E	E6	円形	40×39×15		
124	E	E8	円形	41×42×24		溝1を切る
125	E	E9	楕円形	92×71×14		
126	E	E6	円形	44×40×19		
127	E	E6	楕円形	52×44×19		
128	E	E11	楕円形	55×41×12		
129	E	E10	円形	63×60×10		
130	E	E11	円形	58×55×19		
131	E	E11	円形	43×43×17		
132	E	E11	円形	58×55×19		
134	E	E3	楕円形	52×40×24		
135	E	E9	楕円形	42×34×7		
136	E	E9	円形	40×(38)×25		
138	E	E11	楕円形？	85×(84)×18		攪乱にあう
139	E	E9	楕円形	(56)×47×25		調査区外にかかる
140	E	E11	楕円形？	66×(63)×22		
142	B	B16	楕円形	64×55×16		
144	E	E15	不明	47×16×30		調査区外にかかる
148	B	B15	円形	69×64×7		
149	B	B15	円形	85×75×14		
150	B	B15	円形	39×39×5		
151	B	B18	楕円形	62×53×10		
152	B	B15	円形	26×22×6		
154	B	B11	円形	62×54×27		土90に切られる
159	E	E8	楕円形	95×60×22	古墳後期	
163	B	B13	円形	49×47×16		
164	B	B13	楕円形	80×57×13		
165	E	E15	不明	36×30×16		攪乱にあう
169	E	E18	円形？	79×(39)×22		調査区外にかかる
170	E	E18	楕円形	96×77×30		
171	E	E18	楕円形	203×139×24		
172	E	E18	楕円形	61×45×17		
173	E	E18	円形	41×40×26		
174	E	E18	楕円形	90×68×33		
175	E	E20	円形	65×62×21		
176	E	E20	楕円形	67×46×20		
177	E	E20	円形？	52×(24)×22		調査区外にかかる
178	E	E20	楕円形	85×67×35		
179	E	E20	円形	65×56×24		
180	E	E20	円形	57×56×26		
181	E	E20	円形	40×38×28		

土坑No.	区	図No.	平面形	規模（cm）長軸×短軸×深さ	時期	備考
182	E	E20	楕円形	81×50×32		
183	E	E20	円形	58×56×34		277住を切る
184	E	E20	楕円形	72×52×23		
185	E	E20	円形	56×51×32		
186	E	E20	円形	54×48×30		
188	E	E15	不明	64×(24)×28		調査区外にかかる
189	E	E18	円形	69×(60)×19		土190に切られる
190	E	E18	円形	61×54×18		土189を切る
191	E	E18	楕円形	148×126×30		土192に切られる　調査区外にかかる
192	E	E18	楕円形	97×80×31		土191を切る
193	E	E18	楕円形	45×31×9		
194	E	E21	楕円形	61×51×32		282住を切る
195	E	E21	円形	60×60×28		282住を切る
196	E	E21	円形	53×52×40		
197	E	E21	楕円形	140×50×34		
198	E	E21	楕円形	56×45×31		
199	E	E21	円形	64×59×32		
200	E	E21	円形	53×50×17		
201	E	E21	楕円形	101×75×21		土202を切る
202	E	E21	楕円形	(42)×44×24		土201に切られる
203	E	E21	円形	44×40×24		
204	E	E21	円形	54×50×31		
205	E	E21	円形	61×56×18		
206	E	E21	円形	60×56×33		282住を切る
207	E	E23	円形	34×(31)×20		285住に切られる
208	E	E23	円形	45×44×26		285住を切る
210	E	E24	不明	(39)×29×28		285住を切る
211	E	E20	円形	59×52×10		
212	E	E20	円形	39×35×20		
213	E	E20	楕円形	84×70×18		
214	E	E18	楕円形	75×69×23		
215	E	E21	楕円形	78×56×10		282住を切る
216	A	A7	円形	32×30×50		
217	A	A1	円形	75×74×23		288住を切る
218	A	A6	楕円形	117×84×20	平安？	292住を切る
219	A	A6	楕円形	85×79×27		
221	A	A6	楕円形	70×53×26		
222	A	A6	楕円形	260×113×34	平安	291住を切る
223	A	A6	楕円形？	85×(80)×18	平安	攪乱にあう
224	A	A6	円形	56×50×40		
225	A	A8	円形	29×27×12		
226	A	A9	円形	40×39×26		
227	A	A9	円形	73×70×39	古墳後期	

第4表　鉄器一覧

No.	器種	出土地点	形状・形態、残存状況及び計測値（mm）
322	釘	277住	頭部欠損
323	釘	検出面	被熱・発泡
324	釘	297住	頭部・脚部欠損
325	釘	174住	両端を欠損
326	釘	154住	頭部・脚部欠損
327	釘	164住	脚部欠損
328	不明	164住	先端部欠損
329	紡錘車	158住	両端を欠損
330	刀子	179住	
331	刀子	277住	刃部の一部と茎部を欠損
332	刀子	305住	刃部の一部と茎部を欠損
333	刀子	277住	
334	刀子	179住	刃部の一部と茎部を欠損
335	鎌	検出面	切先部を欠損
336	不明	278住	

Ⅳ 遺物

1．土器・陶器

今回の調査で出土した土器・陶器の総量は132,566gを計る。321点を図示した。年代的には古墳時代中期初頭～前葉、古墳時代後期、奈良・平安時代のものが見られる。以下では各時期ごとに住居址出土遺物を中心にして記述する。土器・陶器の編年観・器種分類等は、古墳時代中期は例言中文献1に、古墳時代後期は文献2に、奈良・平安時代については文献3にそれぞれ従った。古墳時代後期及び奈良・平安時代の器種は第22～24図に示した。なお、古墳時代後期のものと奈良・平安時代のものとは器種名に重複があり、異なる器種に同一の名称が付けられているが、今回は各々の文献中での呼称をそのまま踏襲し、統一を図ってはいない。

(1) 古墳時代中期の土器

遺物集中出土地点1・2出土土器群が該当する。7点を図示した。

遺物集中地点1の土器群（265・266）には小型丸底壺・甕がある。小型丸底壺は古墳時代前期から続く形態のもの。遺物集中出土地点2の土器群（267～271）には高杯・小型甕・小型壺がある。高杯はいずれも屈折脚を有するもの。杯部は胴部と底部の境に稜を持ち、脚部は中空で胴部が若干張る。小型甕は口縁部がく字状に開き、前期からの器形である。小型壺は球胴で口縁部が直線的に開く形態をとり、前期からの器形である。内外面とも調整はあまりていねいにされていない。両集中出土地点の土器群とも、古墳時代前期的な様相を残しており、古墳時代中期初頭～前葉に位置づけられよう。

(2) 古墳時代後期の土器・陶器

157住出土土器群（19～28）

10点を図示。遺物はカマド周辺の床面から多くが出土している。出土量は2,782gを計る。須恵器杯・杯蓋Ab、土師器杯A4、小型甕A・C、甕B、壺Aがある。須恵器杯蓋は、立ち上がりと天井部の境に沈線が施文されるもので、このことから出川南第2段階に位置づけられよう。

191住出土土器群（129～131）

3点を図示。土師器杯B、須恵器杯Ac・Bがある。129は杯Bとしたが、杯蓋Aの可能性もある。遺物はカマドと思われる礫・焼土の分布範囲を中心に出土し、出土量は874gを計る。遺構の大半が攪乱にあい、出土量は少ない。須恵器杯Acは口縁部が短く、内傾する。杯Bの存在と合わせ、出川南第4段階の特徴で、この時期に帰属するものであろう。

192住出土土器群（137～144）

8点を図示。遺物はカマド付近を中心とした床面から多くが出土し、出土量は3,954gを計る。土師器杯Jc、杯Aもしくは高杯A、小型甕、壺、須恵器杯Acがある。出土量のわりに図示しうる個体が少なく、土器群の全体の構成が窺えないが、土師器杯Jc・須恵器杯Acの存在から出川南第3～4段階に帰属するものと思われる。

193住出土土器群（145～152）

8点を図示。遺物は床面付近から多くが出土し、出土量は4,066gを計る。土師器杯A・高杯A、甕A・B・C、甑Cがある。甕Cが存在することから、出川南第4段階に帰属するものであろうか。

288住出土土器群（194）

1点を図示。遺物は覆土中より散漫に出土し、出土量は304gを計る。土師器杯A4を図示できたのみで、古墳時代後期に帰属するものの、詳細な時期は不明である。

290住出土土器群（185～189）

5点を図示。遺物は覆土中より出土し、出土量は992gを計る。須恵器杯蓋Aa・Ab、土師器甕A・小型甕A・壺Aaがある。須恵器杯蓋は新古相を持つものが見られ、帰属時期は出川南第1～2段階である。

297住出土土器群（201～226）

297住からは古墳時代後期と平安時代前期の遺物が出土している。第Ⅳ章で述べたように、本来は2時期の遺構があったものを判別がつかず、一緒に掘り下げてしまったものと思われる。出土状態から297住に伴うのは古墳時代後期の土器群であり、ここではそれらを取り上げる。平安時代のものは次項で扱う。

297住出土の古墳時代後期の土器群は201～216の16点である。該期の土器群はカマド周辺の床面を中心に出土している。遺物の出土量は古墳・平安時代合わせて10,926gを計る。土師器杯A4・Jc・R、小型甕A・E、小型壺B、甕A・B、壺A・Bがある。214・215はカマド袖の芯材として用いられたものである。土師器杯の器種構成から出川南第4段階に帰属するものと思われる。

(3) 奈良・平安時代の土器・陶器

154住出土土器群（1～18）

18点を図示。遺物はカマド周辺から多くが出土し、5,206gを計る。食器に須恵器杯A・高杯、黒色土器A杯A、煮炊き具に土師器甕B・小型甕D、貯蔵具に須恵器甕Dがある。11・12・14・15は他の土器群より古い要素を持ち、おそらく本址に貼られる286住に帰属するものであろう。食器の主体を黒色土器Aが占める。須恵器杯A(2)の外傾指数は101で、器壁は薄い。軟質須恵器は見られない。土師器甕B(14)は定型化以後の形態をとるが、口縁部のナデは胴部に及んでいない。須恵器甕D(16)は、耳部に穿孔がされるが、貫通はしておらず、突帯の断面形状は三角形をなす。以上のような特徴から、本址出土土器群は6期に位置づけられよう。

158住出土土器群（32～62）

31点を図示。遺物はカマド周辺及び遺構東側の床面を中心に出土し、出土量は13,528gと非常に多い。個々の遺物も残存度の高いものが多い。食器に須恵器杯A・杯B・杯蓋B、煮炊き具に土師器甕A・甕B・小型甕A・小型甕B・須恵器甑、貯蔵具に須恵器長頸壺・平瓶がある。須恵器杯Aは底部ヘラ切りにより、外傾指数は59～78。土師器甕は、外面ナデ調整のものが多く、ハケ調整のものは少ない。ナデ調整の甕Aは長胴で胴部最大径が口縁部下あたりである。以上から2期に位置づけられよう。

163住出土土器群（63～73）

11点を図示。遺物は床面付近から大半が出土し、出土量は2,272gを計る。食器に須恵器杯A・黒色土器A杯A・椀・皿B・灰釉陶器椀が、煮炊き具に甕Bがある。食器の主体は黒色土器Aに占められている。土師器甕Bは、外面のナデが口縁部から胴部上半に及んでいる。灰釉陶器椀は内面のみハケ塗り施釉で、黒笹14号窯様式に位置づけられるものである。松本平での黒笹14号窯式の出土例は少なく、注目される。本址土器群は7期に位置づけられるものであろう。

164住出土土器群（74～88）

15点を図示。遺物は床面付近から多くが出土し、出土量は3,556gを計る。食器に軟質須恵器杯A、黒色土器杯A・椀・皿Bが、煮炊き具に土師器甕B・小型甕D・円筒形土器がある。食器の主体を黒色土器Aが占め、これに軟質須恵器が伴い、須恵器は見られない。黒色土器Aには杯Aに加え、椀・皿が出現している。土師器甕Bは定型化以後の形態で、口縁の屈曲部より下までナデが及んでいる。8期に位置づけられよう。

165住出土土器（29～31）

3点を図示。遺物は床面付近から出土し、出土量は1,280gを計る。灰釉陶器椀・土師器椀・土師器甕がある。灰釉陶器椀は三日月高台で、光ケ丘1号窯式のものである。土器群は出土量が少なく判然としないが、8期前後に帰属するものと思われる。

166住出土土器群（89）

土師器小型甕Bを1点図示できたのみ。遺物は覆土中から出土し、特に北東の焼土範囲付近から出土したものが多く、遺物量は812gを計る。帰属時期は判然としない。

168住出土土器群（90～98）

9点を図示。遺物は覆土中から出土し、特に遺構南半が多い。遺物量は2,280gを計る。食器に須恵器杯A・杯B、黒色土器A杯A・皿Bが、煮炊き具に土師器甕B・小型甕Dがある。食器の主体は黒色土器Aに占められており、皿Bが出現している。土師器甕Bは定型化以後の形態のもの。7期に位置づけられる。

176住出土土器群（99～104）

6点を図示。食器に須恵器杯A・高杯、土師器杯が、煮炊き具に土師器甕Aが、貯蔵具に須恵器甕・平瓶がある。土器群の構成の全体が窺えず、帰属時期の詳細は不明だが破片資料も含め、煮炊き具の主体は土師器甕Aが占めるようであり、1～2期に帰属するものか。

178住出土土器群（112～114）

3点を図示。遺物は床面付近から出土し、208gを計る。遺構の大半が攪乱にあっていたため、遺物量は少ない。食器に須恵器杯蓋Bが、煮炊き具に小型甕B・Dがある。須恵器杯蓋Bは、端部がく字状に曲がるもの。小型甕Dは定型化以後のものである。帰属時期ははっきりとしないが、5期前後に位置づけられよう。

179住出土土器群（122～128）

7点を図示。遺物はカマド周辺及び床面から多くが出土し、出土量は2,882gを計る。食器に須恵器杯A・土師器杯が、煮炊き具に土師器甕B・小型甕Dが、貯蔵具に須恵器甕がある。食器の主体を須恵器が占め、杯Aの外傾指数は83～84。土師器甕B・小型甕Dは定型化以後の形態のものである。5期に位置づけられよう。

180住出土土器群（115～121）

7点を図示。遺物はカマド周辺及び覆土中から出土し、出土量は2,078gを計る。食器に須恵器杯A・黒色土器A杯が、煮炊き具に土師器甕B・甕C・円筒形土器がある。食器は須恵器・黒色土器Aの双方で構成される。須恵器杯A（117）の外傾指数は100で、外面のロクロ目が顕著である。甕Bは定型化後の形態をとる。甕Cは口縁部断面形状が「コ」字状を呈する。7期に位置づけられる。

184住出土土器群（105～111）

7点を図示。遺物は床面付近を中心に出土している。食器に黒色土器A杯A、緑釉陶器椀が、煮炊き具に小型甕Dが、貯蔵具に須恵器甕がある。図示できなかったが、須恵器杯Aも出土しており、薄手でロクロ目の強いものである。緑釉陶器椀（108）は生地で、淡黄灰色の胎土で、内外面ともヘラミガキされている。土器群は7期前後に位置づけられよう。

190住出土土器群（132～136）

5点を図示。遺物は覆土中から出土し、出土量は1,192gを計る。遺構の大半が攪乱にあい、出土量は少ない。食器に黒色土器A杯A・土師器杯が、煮炊き具に土師器甕B・円筒形土器が、貯蔵具に須恵器甕がある。土師器甕Bは定型化以後のもので、外面のナデが胴部に及ぶ。帰属時期は判然としないが7～8期あたりに位置づけられようか。

253住出土土器群（153～156）

4点を図示。遺物はほとんどがカマド周辺及び床面から出土している。出土量は1,620gを計る。土師器甕

A・小型甕Cがある。土師器甕Aは口縁部の立ち上がりが長く、強く外反するものもある。破片資料も含め、煮炊き具の主体は土師器甕Aが占めるようである。このことから、帰属時期は古墳時代後期～古代2期の範囲に収まるものと思われる。

263住出土土器群（157～160）

4点を図示。遺物はカマド周辺及び覆土中から出土し、出土量は1,562gを計る。土師器盤・須恵器横瓶・土師器甕Bがある。土師器甕Bは内外面にハケが施され、外面のハケは横方向であり、器壁は厚手であるなど、定型化以前のものである。口縁部は比較的長く立ち上がり、強く外反する。出土量が少なく帰属時期は判然としないが、甕Bの特徴から1～2期に帰属するものか。

277住出土土器群（161～175）

15点を図示。遺物はカマド周辺及び床面・ピット内から多くが出土し、遺物量は13,014gと非常に多い。食器に須恵器杯A・B・杯蓋B、土師器盤、煮炊き具に土師器甕A・B、貯蔵具に甕がある。須恵器杯の底部は全てヘラ切りにより、回転糸切りによるものは見られない。外傾指数は63から82。杯Bは高台が屈曲部のすぐ内側につく。甕は胴部最大径が口縁部直下にあるものが多い。2期に位置づけられよう。

281出土土器群（176～179）

4点を図示。遺物は覆土中から出土し、出土量は860gを計る。食器に須恵器杯A、煮炊き具に土師器甕A・小型甕Bがある。須恵器杯は底面ヘラ切りで、外傾指数は78。土師器小型甕Bは比較的厚手で、口縁部は短く強く外反する。出土量が少なく帰属時期は判然としないが、甕Aが残存していること、須恵器杯A・小型甕Bの特徴から、2期～4期の間に収まるものと思われる。

282住出土土器群（182・183）

2点を図示。遺物はカマド周辺を中心とした床面から多くが出土し、出土量は1,468gを計る。食器に須恵器杯Aが、煮炊き具に土師器甕Bがある。須恵器杯Aは底面ヘラ切りで外傾指数は67。甕Bは内外面ともハケ調整で、器壁は厚手であり、定型化以前のものである。出土点数が少なく、帰属時期は判然としないが、2期～4期の間に収まるもので、5期までは下らないと思われる。

285住出土土器群（195）

1点を図示。遺物はカマド周辺を中心に出土し、遺物量は1,158gを計る。土師器甕Bは、定型化以後のもので、口縁部は短く強く外反する。この他に図示できなかったが、薄手で外面にロクロ目の顕著な須恵器杯Aも出土している。以上から6～7期に帰属するものと思われる。

286住出土土器群（184）

1点を図示。遺物は覆土中から出土し、出土量は468gを計る。図示したのは土師器甕Aで、口縁部は長く、外反は緩い。この他に、286住を貼る154住出土として取り上げた10～13も本来は本址に帰属するものと思われる。これらを合わせると、本土器群は食器が須恵器杯A・高杯、煮炊き具が土師器甕B、貯蔵具が須恵器甕から構成されることになる。帰属時期の詳細は不明だが、甕Bの形態等から1～3期に帰属するものであろう。

289住出土土器群（180・181）

2点を図示。遺物は覆土中より散漫に出土し、出土量は144gを計る。図示できたのは食器の須恵器杯A、煮炊き具の土師器甕Bである。須恵器杯Aは底面回転糸切りにより、外傾指数は113で、外面のロクロ目は強い。土師器甕Bは器壁が比較的厚手で、外面は横方向のハケにより、定型化以前のものであろう。図示した2点の年代には離れがあり、帰属時期は判然としない。

291住出土土器群（190～193）

4点を図示。遺物はカマド周辺から多くが出土し、出土量は2172gを計る。須恵器杯A・黒色土器AⅢA・

土師器甕Bがある。須恵器杯Aの外傾指数は89・118で、191は薄手でロクロ目が顕著である。甕Bは定型化したもので、口縁部は短く、強く外反する。点数が少なく詳細が不明だが、6～7期に帰属するものである。

292住出土土器群（196～200）

5点を図示。遺物は床面付近から多くが出土し、出土量は4,910gを計る。食器に須恵器杯Aが、煮炊き具に小型甕Dが、貯蔵具に土師器把手付壺と須恵器甕がある。図示できなかったが、定型化した土師器甕Bも出土している。須恵器杯Aは薄手でロクロ目の強いもの。199の把手杯壺は古墳時代後期に帰属するもので、混入と考えたい。6～7期に帰属する。

297住出土土器群（217～226）

先述のように297住からは古墳時代後期及び平安時代前期の遺物が出土しており、双方ともまとまった内容を有している。ここでは平安時代のものを扱う。図示できたのは10点である。食器に須恵器杯A・杯蓋B、黒色土器A杯・皿Bが、煮炊き具に土師器甕Dがある。食器は黒色土器と須恵器から構成されている。須恵器杯Aは薄手で外面のロクロ目が顕著である。このことと、黒色土器A皿Bが出現していることから6～7期に位置づけられよう。なお、218・219は口縁部に墨書による五芒星が観察された。217は住居址北側の覆土中から、219・220は住居址南側の覆土上層から近接した位置で出土している。松本市内では五芒星の墨書の出土例は初めてであり、注目される。

298住出土土器群（227～239）

13点を図示。遺物は床面を中心に出土し、出土量は4,546gを計る。土器群には古墳時代後期のものと平安時代のものとがある。出土状態から298住に伴うのは平安時代のものである。古墳時代の土器群には、土師器杯・小型甕・甕がある。年代の決め手となるものがなく、古墳時代後期に帰属するとしかわからない。平安時代の土器群は、食器に須恵器杯A・黒色土器A杯Aが、煮炊き具に土師器甕B・C・小型甕Dがある。食器は須恵器と黒色土器Aから構成される。須恵器杯Aは器壁が薄く、外面のロクロ目は強い。外傾指数は104・116である。土師器甕Bは比較的厚手だが、定型化以後のもの。甕Cは外面の体部及び口縁部に稜が形成される。7期に帰属するものである。

301住出土土器群（240～245）

6点を図示。食器に須恵器杯Aが、煮炊き具に土師器甕A・円筒形土器、貯蔵具に土師器壺がある。242・243・245は他の土器群より古く、下っても奈良時代のもので、他の平安時代のものと年代があわない。2時期の遺物の分布状況の偏りを把握することはできなかった。

302住出土土器群（248）

1点を図示。須恵器高杯で、1～4期に存在する。他にめぼしい遺物はなく、帰属時期も不明である。

307住出土土器群（246・247）

2点を図示。須恵器杯A、土師器壺を図示できたのみ。帰属時期ははっきりとしないが、奈良時代に帰属するものであろうか。

2．鉄器

15点を図示。釘（322～327）、紡錘車（329）、刀子（330～334）、鎌（335）がある。328・336は不明。各々の詳細については第4表に譲る。共伴遺物から年代のわかるものとして、古墳時代後期（出川南第4段階）に324が、古代2期に322・329・331・333・335が、5期に330・334が、7期に326が、8期に327・328がある。

第5表　土器・陶器一覧

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
1	154住	154-1	須恵	杯A	11.6	(5.4)	4.0		1/3	淡褐灰	淡褐灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
2	154住	154-3	須恵	杯A	13.6	6.0	3.8	完	完	黄灰	黄灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
3	154住	154-7	黒A	杯A	12.8	6.8	3.9	5/6	完	淡褐～黒褐	黒	内外ともロクロナデ　底面静止糸切り未調整　内面黒色処理　放射状ミガキ
4	154住	154-4	黒A	杯A	12.7	5.8	3.0	1/5	3/4	淡黄褐～淡灰褐	黒	内外ともナデ　内面黒色処理　底面回転糸切り未調整
5	154住	154-6	黒A	杯A	13.4	6.1	3.6	2/3	5/6	褐～黒褐	黒	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整　内面黒色処理　放射状ミガキ
6	154住	154-5	黒A	杯A	(12.5)	(5.9)	3.1	1/2	完	橙褐～黒褐	黒	内外ともロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ　底面回転糸切り未調整　底面にヘラ記号あり
7	154住	154-10	土師	小型甕D	(11.2)			1/4		橙褐～灰橙褐	暗褐～黒褐	外面カキ目口縁部横ナデ　内面口縁部カキ目　胴部ロクロナデ
8	154住	154-8	土師	小型甕D	(13.0)			1/6		橙褐～灰褐	淡褐～灰褐	外面カキ目　口縁部横ナデ　内面口縁部カキ目胴部工具ナデ
9	154住	154-16	須恵	甕		(10.0)			1/5	灰	灰～暗灰	内外ともロクロナデ　底面ナデ
10	154住	154-11	須恵	杯A	(9.2)			1/3		淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転ヘラ切り
11	154住	154-2	須恵	瓶類？		(5.2)			完	暗灰～暗赤灰	暗赤灰	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
12	154住	154-12	須恵	高坏					↑	灰白～淡灰	灰白～淡灰	内外ともロクロナデ
13	154住	154-14	須恵	甕						淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　外面上半回転ヘラケズリ
14	154住	154-9	土師	甕B	(23.4)			1/8		橙褐～灰橙褐	橙褐	外面ハケ口縁部横ナデ　内面眉曲部カキ目　胴部ナデ
15	154住	154-17	須恵	甕	(27.2)			1/3		暗灰～黒灰	暗紫灰	内外ともロクロナデ　口縁部横ナデ
16	154住	154-18	須恵	甕D						暗灰～赤灰	暗灰～灰	外面タタキ目　突帯貼り付け後ナデ　内面当て具痕
17	154住	154-13	須恵	甕		(13.4)			1/8	淡灰	黒灰	内外ともロクロナデ　外面底部付近回転ヘラケズリ　底面回転糸切り後ナデ
18	154住	154-15	土師	甕B	(25.0)			1/12		淡褐～黒褐	淡褐	内外ともハケ　口縁部横ナデ
19	157住	157-1	須恵	杯蓋A	(11.0)		3.1	1/4		灰	灰	内外ともロクロナデ　外面天井部回転ヘラケズリ
20	157住	157-2	須恵	杯B	(11.6)			1/10		青灰	青灰	内外ともロクロナデ
21	157住	157-3	土師	杯A	(14.6)			一部		黒～暗褐	黒	内外ともナデ　内面黒色処理　やや雑な横ミガキ
22	157住	157-4	土師	小型甕A	(8.8)			一部		橙褐	橙褐	内外とも工具ナデ
23	275住	275-2	土師	甕		(7.2)			1/2	暗褐～黒変	暗褐	内外面工具ナデ　底面ナデ
24	157住	157-6	土師	小型甕A	10.3	5.1	10.6	2/3	完	褐～暗褐	褐～暗褐	外面縦の工具ナデ後ナデ　底面付近ハケ　内面工具ナデ後底部付近螺旋状の強い工具ナデ
25	157住	157-7	土師	小型甕C	11/1	6.0	13.3	1/2	完	暗赤褐	暗褐	外面ハケ　底部付近ミガキ　口縁部横ナデ　内面口縁部ハケ　胴部工具ナデ
26	275住	275-1	土師	甕？		(6.0)			1/5	暗褐	暗褐	外面ハケ摩滅　内面工具ナデ
27	157住	157-5	土師	甕B	(18.4)			1/10		暗褐	褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
28	283住	283-1	土師	壺A	(17.0)			1/3		暗褐	暗褐～暗橙褐	外面ミガキ摩滅　内面ミガキ
29	165住	165-2	土師	杯	(11.4)			1/8		暗褐～黒変	暗褐～黒変	内外ともロクロナデ
30	165住	165-1	灰釉	椀		(8.6)			5/8	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面底部付近回転ヘラケズリ　内面重ね焼き痕　底面回転ヘラケズリ
31	165住	165-3	土師	甕？	(15.2)			1/10		暗橙褐	暗橙褐	内外ともナデ
32	158住	158-8	須恵	杯蓋B	(12.0)			1/8		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　上面にタタキ目状の工具の跡あり
33	158住	158-5	須恵	杯B		(9.6)			1/4	灰	灰	内面ロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ
34	158住	158-4	須恵	杯A	(13.0)			1/4		白灰	白灰	内外ともロクロナデ　底部付近回転ヘラケズリ
35	158住	158-1	須恵	杯A	13.2	7.4	3.7	1/2	完	青灰	青灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り後ナデ

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
36	158住	158-3	須恵	杯A	13.6	8.4	4.4	7/8	完	淡黄灰	淡黄灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
37	158住	158-2	須恵	杯A	(14.6)	(7.5)	4.5	1/4	完	青灰	青灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
38	158住	158-9	須恵	壷？	(7.6)			1/3		黒灰	灰	内外ともロクロナデ　外面自然釉付着
39	158住	158-10	須恵	平瓶						白灰	白灰	内外ともロクロナデ
40	158住	158-11	須恵	横瓶	(13.0)			1/4		灰	灰	内外ともロクロナデ　内外とも自然釉付着
41	158住	158-6	須恵	長頸壷B	(13.2)			1/6		暗灰	暗灰	内外とも横ナデ　自然釉付着
42	158住	158-7	須恵	甕	(16.8)			1/12		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ
43	158住	158-12	土師	杯D	(12.0)			1/5		褐	黒	内外ともミガキ摩滅
44	158住	158-13	土師	杯D	(13.4)			1/8		黒～黄褐	黒	外面口縁部ミガキ摩滅　底部付近ヘラケズリ　内面ミガキ摩滅
45	158住	158-27	須恵	甑		(16.0)			1/4	暗黄灰	暗黄灰	内外ともロクロナデ　外面底部付近ヘラケズリ後ナデ　底面ヘラケズリ後ナデ
46	158住	158-14	土師	小型甕	(8.6)			1/6		暗褐	黒	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
47	158住	158-20	土師	甕A		(8.0)			1/2	暗橙褐	暗橙褐	内外とも工具ナデ
48	158住	158-29	土師	小型甕A		8.1			完	淡褐～灰褐	淡褐	外面ナデ　内面工具ナデ　底面木葉痕
49	158住	158-22	土師	甕A		(9.4)			完	暗褐	暗橙褐	内外とも工具ナデ　底面木葉痕
50	158住	158-18	土師	甕B		(8.0)			1/3	暗褐	灰褐	外面ハケ摩滅　内面工具ナデ　底面木葉痕
51	158住	158-19	土師	甕B		(6.4)			完	橙褐	暗褐	外面ハケ　内面工具ナデ　底面木葉痕
52	158住	158-21	土師	小型甕A	(13.4)			1/6		橙褐	黒～橙褐	内外とも工具ナデ摩滅　口縁部横ナデ
53	158住	158-15	土師	小型甕B	(12.0)			1/4		褐	褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ　口縁部横ナデ
54	158住	158-16	土師	小型甕B	(15.2)			1/8		橙褐	橙褐	外面ハケ摩滅　口縁部横ナデ　内面ナデ摩滅
55	158住	158-17	土師	甕A	(18.6)			1/8		橙褐	橙褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
56	158住	158-24	土師	小型甕A	(14.8)			1/4		暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
57	158住	158-28	土師	小型甕A	16.5	7.1	18.3	完	完	暗褐	暗褐	外面工具ナデ　内面工具ナデ　接合部外面横工具ナデ　内面ケズリ　底面木葉痕
58	158住	158-23	土師	甕A	(23.6)			1/8		褐	褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
59	158住	158-25	土師	甕A	22.6			1/12		橙褐	橙褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
60	158住	158-31	土師	甕A	(24.6)	(8.4)		3/4	完	暗褐	橙褐	内外面とも工具ナデ　口縁部横ナデ　頸部内面一部ハケ
61	158住	158-30	土師	小型甕B	(15.4)	13.2	16.6	3/4	完	明赤褐	褐	外面ハケ　口縁部ナデ　内面ナデ摩滅　底面木葉痕
62	158住	158-26	土師	甕A	(26.0)			1/5		黒～橙褐	暗褐	外面工具による密なナデ　内面工具ナデ　一部指頭圧痕
63	163住	163-11	須恵	杯A		(5.2)			1/3	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
64	163住	163-6	黒A	杯A	(13.6)	(6.6)	3.6	1/4	1/3	暗橙褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ口縁部横ミガキ　底面回転糸切り未調整
65	163住	163-5	黒A	杯A	13.6	6.3	4.1	1/2	完	暗橙褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ口縁部横ミガキ　底面回転糸切り後ナデ
66	163住	163-9	黒A	杯A	(14.6)	(8.0)	3.8	1/3	1/5	黄褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ口縁部横ミガキ　底面回転糸切り未調整
67	163住	163-7	黒A	椀		(7.0)			完	暗橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
68	163住	163-8	黒A	皿B	(13.0)	(5.0)	(2.9)	完	完	灰褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ摩滅　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
69	163住	163-10	灰釉	椀	(16.0)			1/8		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面下半回転ヘラケズリ　内面ハケ塗り施釉
70	163住	163-4	土師	甕		(10.8)			2/3	暗褐	暗褐	外面ケズリ　内面ロクロナデ　底面ナデ
71	163住	163-2	土師	甕		(10.2)			1/4	暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ　底面ナデ
72	163住	163-3	土師	甕B	(21.0)			1/8		褐～暗褐	褐～暗褐	外面ハケ後カキ目　内面ナデ口縁部カキ目
73	163住	163-1	土師	甕B	(22.2)			1/6		暗橙褐	褐～暗褐	外面ハケ　口縁部から胴上部横ナデ　内面指ナデ口縁部カキ目
74	164住	164-13	軟質須恵	杯A	(13.6)	(5.2)	(4.0)	1/2	1/2	灰～黒変	灰～黒変	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
75	164住	164-15	軟質須恵	杯A	(13.2)	(5.2)	(4.0)	1/4	3/4	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
76	164住	164-14	軟質須恵	杯A	13.9	5.6	4.7	7/8	完	黄灰～暗灰	黄灰～明灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
77	164住	164-11	黒A	皿B	(13.6)			1/4		暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ縦・横
78	164住	164-12	黒A	杯A		(5.8)			1/4	暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　底面回転糸切り未調整
79	164住	164-8	黒A	鉢A		(9.8)			5/8	暗橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　底面回転糸切り未調整
80	164住	164-10	黒A	杯?	(12.8)			1/6		暗褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ縦　口縁部横ミガキ
81	164住	164-9	黒A	杯?	(16.4)			1/6		暗褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　口縁部横ミガキ
82	164住	164-7	黒A	杯A	(17.2)	(7.6)	(5.1)	1/3	1/2	暗橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　口縁部横ミガキ　底面回転糸切り未調整
83	164住	164-6	黒A	椀	(16.4)	(6.6)	(5.9)	1/4	完	暗橙褐	黒～暗褐	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ摩滅　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
84	164住	164-2	土師	甕		(8.6)			1/5	暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ
85	164住	164-5	土師	小型甕D	(11.6)			1/6		暗褐	橙褐～暗橙褐	外面カキ目摩滅　口縁部横ナデ　内面ナデ　口縁部カキ目
86	164住	164-4	土師	小型甕D						暗褐	暗褐	外面カキ目　内面ナデ口縁部カキ目
87	164住	164-3	土師	円筒形土器		(12.4)			1/4	暗褐	暗褐	外面ハケ　底部付近ヘラケズリ　内面上半指ナデ下半工具ナデ
88	164住	164-1	土師	甕B	(21.6)			1/5		暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ　口縁部ナデ一部カキ目　内面指ナデ　口縁部カキ目
89	166住	166-1	土師	小型甕A		(7.6)			1/2	暗褐～暗橙褐	暗褐	外面ハケ　底部付近ケズリ　内面上半工具ナデ　下半指ナデ　底部付近ハケ　底面木葉痕
90	168住	168-9	須恵	杯A	(13.0)			1/3		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ
91	168住	168-8	須恵	杯B		(8.2)			5/8	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ
92	168住	168-6	黒A	皿B	(13.2)			1/4		暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ口縁部横、以下縦
93	168住	168-3	黒A	皿B	(13.4)	(6.6)	(2.3)	1/12	7/8	淡褐～暗褐	淡褐～黒変	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
94	168住	168-5	黒A	杯A		(6.0)			1/3	暗褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　底面回転糸切り未調整
95	168住	168-7	土師	甕	(12.8)			1/10		暗褐	暗褐	内外とも横ナデ
96	168住	168-4	黒A	鉢A		(9.6)			5/8	暗褐～暗橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　底面回転糸切り未調整
97	168住	168-2	土師	小型甕D		(5.8)			完	暗褐～暗橙褐	暗褐	外面カキ目　内面ロクロナデ　底面同転糸切り未調整
98	168住	168-1	土師	甕B	(23.8)			1/10		暗褐	暗褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面指ナデ　口縁部カキ目
99	176住	176-7	黒A	皿?	12.0			1/10		淡褐	淡褐	内外ともロクロナデ
100	176住	176-2	須恵	高坏?		(9.2)			1/8	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ
101	184住	184-4	須恵	杯A		3.7			完	暗灰	灰	外面回転ヘラケズリ　内面ロクロナデ　底面にヘラ記号あり
102	176住	176-5	土師	甕A	(19.0)			1/15		淡褐～黒	褐	外面ケズリ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ
103	176住	176-10	須恵	甕か		(6.6)			1/3	暗褐	褐	内外とも工具ナデ　底面木葉痕
104	176住	176-9	須恵	甕か						灰	灰	内外ともロクロナデ
105	184住	184-1	黒A	杯A	12.9	5.5	4.4	5/8	完	褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ口縁部横、以下縦
106	176住	176-1	黒A	杯A	(13.8)	(5.8)	4.0	3/7	1/2	淡褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ　口縁部は横ミガキ　底面回転糸切り未調整
107	176住	176-6	黒A	杯A	(15.0)	5.5	4.7	3/8	3/5	橙褐～黒変	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ
108	184住	184-3	緑釉	椀	(19.6)	(9.5)	5.5	1/3	1/4	淡黄灰	淡黄灰	緑釉素地で施釉なし　内外ともロクロナデ後一部横ミガキ　内面重ね焼き痕　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ
109	176住	176-4	須恵	甕		(18.8)			1/15	灰	暗灰	外面タタキ・工具ナデ　内面工具ナデ
110	176住	176-3	土師	小型甕D	(12.6)	(6.2)	11.9	1/6	1/3	褐～暗褐	褐～暗褐	外面カキ目　下半ロクロナデ　口縁部横ナデ　内面ロクロナデ　口縁部カキ目　底面回転糸切り未調整
111	184住	184-2	灰釉	瓶						暗灰	灰～暗灰	外面下半回転ヘラケズリ　上半ロクロナデ　内面ロクロナデ
112	178住	178-1	須恵	杯蓋B	(14.2)			1/10		灰	灰	内外ともロクロナデ　外面天井部回転ヘラケズリ

№	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
113	178住	178-3	土師	小型甕D	(14.4)			1/3		褐～灰褐	淡褐～淡灰褐	外面カキ目　口縁部ナデ　内面ナデ　口縁部カキ目
114	178住	178-2	土師	小型甕B		(7.8)		1/5		淡褐～淡灰褐	淡褐～淡灰褐	外面ハケ　底部付近ヘラケズリ　内面ハケ　底面ナデ
115	180住	180-7	須恵	杯A		4.6			完	暗灰～灰褐	暗灰～灰褐	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
116	180住	180-5	黒A	杯?	(10.6)			1/6		暗褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　横ミガキ
117	180住	180-6	須恵	杯A	(13.8)	(6.2)	(3.8)	1/6		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
118	180住	180-4	黒A	杯?	(14.0)			1/6		暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ縦・横
119	180住	180-2	土師	甕B	(21.0)			1/8		暗褐	暗褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面カキ目
120	180住	180-3	土師	甕C	(21.0)			1/6		橙褐	橙褐	外面口縁から頸部横ナデ　胴部ヘラケズリ　内面工具ナデ
121	180住	180-1	土師	円筒形土器		(12.0)			1/3	褐～暗褐	暗褐	外面ハケ　底部付近ヘラケズリ　内面上半指ナデ　下半工具ナデ
122	179住	179-5	須恵	杯A	(12.2)	(5.8)	(3.8)	3/8	1/2	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
123	179住	179-4	須恵	杯A	13.4	7.2	3.8	完	完	淡灰褐～暗灰	黄灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
124	179住	179-7	土師	杯	(15.8)			1/4		淡褐～暗褐	淡褐～暗褐	内外ともロクロナデ
125	179住	179-3	土師	甕B	(20.2)			1/8		暗褐	暗褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ　口縁部カキ目
126	179住	179-2	土師	甕B	(24.6)			1/5		橙褐～暗褐	橙褐～暗褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面下半指ナデ　上半工具ナデ　口縁部カキ目
127	179住	179-6	須恵	甕A	(22.0)			1/6		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　内面自然釉付着
128	179住	179-1	土師	小型甕D	(16.4)	(7.6)	(22.3)	2/3	1/4	暗褐	暗褐	外面カキ目　口縁部横ナデ　内面ナデ
129	191住	191-3	須恵	杯B	(14.5)			1/8		灰	緑灰	内外面ともロクロナデ　内外面自然釉付着
130	191住	191-2	須恵	杯A	(10.2)			1/8		淡灰～灰	淡灰～黒灰	内外面ともロクロナデ
131	191住	191-1	土師	杯B	(10.2)			1/3		暗褐～黒褐	暗褐	内外面上半横ナデ　下半ミガキ摩滅
132	190住	190-1	土師	杯	(11.5)			1/12		褐～灰褐	褐	内外ともロクロナデ
133	190住	190-2	黒A	杯	(13.5)			1/10		褐～黒	黒	内外ともロクロナデ
134	190住	190-4	土師	円筒形土器						褐～橙褐	褐～灰褐	外面ハケ摩滅　内面ナデ　指圧痕あり
135	190住	190-3	須恵	甕		(16.8)			一部	灰～暗灰	淡灰	外面タタキ目　底部付近ヘラケズリ　内面ハケ
136	190住	190-5	土師	甕B	(25.6)	(12.6)		一部	1/9	暗褐～暗灰褐	暗褐～黒褐	外面ハケ　口縁部ナデ　内面ナデ
137	192住	192-6	須恵	杯A	(8.9)			1/3		暗灰	灰	内外ともロクロナデ　底部付近外面回転ヘラケズリ
138	192住	192-4	土師	杯J	(13.5)			1/20		淡褐	淡褐～淡灰褐	外面口縁部ミガキ摩滅　底部ケズリ　内面ミガキ摩滅
139	192住	192-1	土師	小型甕	(13.0)			1/6		橙褐	淡灰褐	外面ナデ　内面ハケ
140	192住	192-5	土師	甕		(7.0)			3/4	暗褐～黒褐	暗褐～灰褐	外面ハケ　内面ミガキ　底面ナデ
141	192住	192-3	土師	高坏?	(18.4)			1/12		淡褐～淡灰褐	褐～橙褐	内外ともミガキ摩滅か
142	192住	192-2	土師	甕	(19.2)			1/10		淡褐～灰褐	淡褐～灰褐	外面ナデ　一部ハケ　内面ハケ
143	192住	192-7	土師	壺	(19.7)			1/3		淡黄褐～淡褐	淡灰褐～褐	外面ナデ　内面ミガキ
144	192住	192-8	土師	壺	(23.0)			1/10		褐～橙褐	淡灰褐～橙褐	内外ともミガキ
145	193住	193-1	土師	杯A	(8.6)			1/6		淡灰褐～暗灰褐	淡褐～黒褐	外面ナデ　内面ミガキ摩滅
146	193住	193-2	土師	高坏A	(15.8)			1/3		橙褐～黒	黒	内外面ともミガキ　内面黒色処理
147	193住	193-6	土師	甑C		5.4			完	淡褐～淡灰褐	黒	外面摩滅　内面ナデ　焼成前穿孔
148	193住	193-3	土師	甕C	(17.2)			1/8		褐～橙褐	褐～橙褐	外面ハケ　内面ハケ　口縁部ナデ
149	193住	193-5	土師	甕A	(15.6)			1/6		淡褐～淡灰褐	灰褐～暗灰褐	外面ナデ　内面ハケ　口縁部ナデ
150	193住	193-8	土師	甕?	(23.0)			2/3		橙褐～黒褐	褐～黒褐	外面ケズリ　一部粗いミガキ　口縁部横ナデ　内面下半ケズリ　上半工具ナデ　一部ケズリ
151	193住	193-4	土師	甕B	(15.8)			1/8		灰褐～暗灰褐	灰褐～暗灰褐	内外とも工具ナデ

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
152	193住	193-7	土師	甕B	(15.4)			1/8		暗褐～暗灰褐	褐～暗灰褐	内外とも工具ナデ
153	253住	253-3	土師	小型甕		8.4			1/2	褐～暗橙褐	褐～暗褐	外面ハケ　底部付近工具ナデ　内面ハケ　底面木葉痕
154	253住	253-4	土師	小型甕C	(9.8)			一部	完	淡灰褐～暗灰褐	暗灰褐	外面ハケ　内面工具ナデ底部付近ハケ　口縁部ナデ
155	253住	253-2	土師	甕A	(19.2)			一部		暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
156	253住	253-1	土師	甕A	(21.2)			1/3		暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
157	263住	263-2	須恵	杯A	(13.4)			1/8		灰	灰	内外ともロクロナデ
158	263住	263-3	黒A	盤？		(9.0)			1/4	暗褐	黒	杯部内面黒色処理ミガキ摩滅　外面ミガキ摩滅一部ハケ痕　脚部がいめんナデ後ミガキ摩滅　内面ナデ
159	263住	263-1	須恵	横瓶						暗灰	暗灰	外面タタキ目・ロクロナデ　内面ロクロナデ
160	263住	267-1	土師	甕B	(33.8)			1/5		暗褐	暗褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面ハケ　口縁部横ナデ
161	277住	277-2	須恵	杯蓋B	(13.6)			1/8		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　天井部外面回転ヘラケズリ
162	277住	277-3	須恵	杯A	(12.4)	(7.6)	3.8	1/4	1/3	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
163	277住	277-1	須恵	杯A	12.7	4.8	4.8	完	完	灰	灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り後ナデ
164	280住	280-6	須恵	杯A	(14.2)	(8.6)	(4.1)	一部	1/6	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
165	277住	277-5	須恵	杯A	(13.8)	(5.2)	5.5	一部	完	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　内面自然釉付着　底面ヘラ切り後ナデ　ヘラ記号あり
166	280住	280-2	土師	甕		4.6			完	暗褐～暗橙褐	暗褐～暗橙褐	外面工具ナデ　内面ナデ
167	280住	280-5	須恵	杯A？		(10.2)			1/6	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
168	280住	280-4	須恵	杯B	(16.8)	(13.0)	(4.0)	1/4	1/4	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転ヘラケズリ
169	280住	280-3	須恵	鉢		(5.2)			1/8	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面一部自然釉付着　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
170	277住	277-4	土師	小型甕A	(9.0)			1/6		褐	褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
171	277住	277-8	土師	甕B		(7.8)			完	褐	暗褐	外面ハケ摩滅　内面工具ナデ　底面木葉痕
172	277住	277-6	土師	盤？	(22.2)			2/3		濃橙褐	濃橙褐	内外ともミガキ摩滅
173	277住	277-9	土師	甕A	(23.8)			1/2		褐～暗褐	褐～暗褐	外面工具ナデ　内面工具ナデ　口縁部横ナデ
174	277住	277-7	土師	甕A	(25.6)			1/8		暗褐	暗褐	外面工具ナデ　口縁部横ナデ　内面上半工具ナデ　下半指ナデ・工具ナデ
175	280住	280-1	土師	甕B	(23.8)			1/5		褐～暗褐	褐～暗褐	外面ハケ一部カキ目　口縁部横ナデ　内面下半指ナデ　上半工具ナデ
176	281住	281-4	須恵	杯A？		(9.2)			1/4	暗灰～暗橙灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
177	281住	281-1	須恵	杯A	(14.8)	(8.4)	(4.1)	1/3	1/3	灰～暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面ヘラ切り
178	281住	281-2	土師	小型甕B	(14.0)			1/6		暗橙褐	暗褐	外面ハケ　内面工具ナデ　口縁部横ナデ
179	281住	281-3	土師	甕A		(10.0)			1/6	暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ　底面ナデ
180	289住	289-1	須恵	杯A	(13.8)	(6.8)	(3.1)	1/6	1/4	黒灰～暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
181	289住	289-2	土師	甕B	(22.4)			一部		褐	褐	外面ハケ摩滅　口縁部横ナデ　内面工具ナデ
182	282住	282-2	須恵	杯A	13.6	7.4	4.6	7/8	完	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面底部付近回転ヘラケズリ　底面ヘラ切り
183	282住	282-1	土師	甕B		(8.2)			1/6	暗褐～暗橙褐	暗橙褐	内外ともハケ　底面ナデ
184	286住	286-1	土師	甕A	(23.2)			1/8		褐	暗褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
185	290住	290-2	須恵	杯蓋A	(10.0)			一部		暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面自然釉付着
186	290住	290-1	須恵	杯蓋A	(10.8)	(5.3)	3.3	1/3	1/2	黒灰～暗紫灰	黒灰	内外ともロクロナデ　外面天井部付近回転ヘラケズリ　天井部ヘラ切り
187	290住	290-4	土師	小型甕A	(13.6)			1/8		褐	暗褐	外面工具ナデ　内面ハケ一部工具ナデ　口縁部横ナデ
188	290住	290-5	土師	甕A		(8.0)			一部	黒褐	褐	外面ケズリ　内面工具ナデ　底面ケズリ・ナデ
189	290住	290-3	土師	壺A	(15.0)			1/6		濃橙褐	暗橙褐	外面胴部ケズリ後粗いミガキ　口縁部下半工具ナデ,上半横ナデ　内面工具ナデ一部指頭圧痕　口縁部ナデ

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量				残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高		口縁	底部	外面	内面	
190	291住	291-1	須恵	杯A	(13.0)	(6.6)	3.6		1/2	1/4	暗青灰	暗青灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
191	291住	291-2	須恵	杯A	13.1	5.3	3.3		3/4	完	暗白黄灰	暗青灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
192	291住	291-3	黒A	皿B	(13.8)				1/2	完	暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　底面回転糸切り後ナデ　高台欠損
193	291住	291-4	土師	甕B	(23.0)				1/8		暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面指ナデ・指圧痕　口縁部カキ目
194	288住	288-1	土師	杯A	(17.6)				1/8		橙褐	黒	外面摩滅　内面黒色処理　ミガキ摩滅
195	285住	285-1	土師	甕B	(23.8)	(8.5)	(32.2)		1/4	1/2	暗褐	褐～黒褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面指ナデ・工具ナデ　口縁部付近カキ目
196	292住	292-3	土師	小型甕		(7.6)				完	暗褐	暗橙褐	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
197	292住	292-2	須恵	杯A		(5.6)				2/3	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面雑なヘラ切り
198	292住	292-1	須恵	杯A	(12.2)	(5.2)	3.5		1/4	1/4	橙灰～暗紫灰	橙灰～暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
199	292住	292-4	土師	把手付壺							橙褐	暗橙褐	外面ミガキ　把手部貼り付け後ナデ　内面ハケ摩滅　一部工具ナデ
200	292住	292-5	須恵	甕							暗灰	暗灰～黒灰	外面タタキ目　内面当て具痕後ナデ
201	297住	297-25	須恵	杯A	(9.0)				1/6		暗青灰	暗青灰	内外ともロクロナデ
202	297住	297-26	土師	杯J	(12.6)				1/6		暗褐～黒	黒	外面黒色処理か？ミガキ摩滅　内面黒色処理　ミガキ摩滅
203	297住	297-10	土師	杯R	(10.4)				一部		褐	暗橙褐	外面ナデ摩滅　内面工具ナデ
204	297住	297-8	土師	杯R	(12.6)		6.5		1/8		黒～橙褐	黒～濃褐	内外ともミガキ摩滅
205	297住	297-3	土師	小型甕		(7.7)				一部	暗褐	黒褐	内外とも工具ナデ　底部付近ヘラケズリ
206	297住	297-2	土師	杯R	(14.0)	(6.2)	6.5		1/3	1/2	暗褐	黒	内外・底面ともミガキ　外面底部付近ケズリ後ミガキ
207	297住	297-11	土師	杯A	(18.4)	(8.4)	4.5		一部	完	褐	褐	外面ミガキ　底部付近はヘラケズリ後粗いミガキ　内面ミガキ
208	297住	297-15	土師	長頸壺							暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　内外面自然釉付着
209	297住	297-5	土師	小型甕E		7.2				完			外面摩滅　脚部指ナデ　内面工具ナデ
210	297住	297-12	土師	壺A	(19.0)				2/3		黒～暗褐	褐～暗褐	内外とも工具ナデ後ミガキ
211	297住	297-13	土師	甕B	(19.6)				1/8		暗褐	暗褐	外面工具ナデ　内面指ナデ
212	297住	297-14	土師	甕B							黒～暗褐	暗褐	内外とも工具ナデ
213	297住	297-17	土師	小型壺B	12.3	7.7	19.0		完	完	暗褐～褐	暗褐～褐	外面ケズリ後ミガキ　内面工具ナデ後ミガキ　口縁部に穿孔2単位　焼成後穿孔
214	297住	297-18	土師	甕A	15.8	7.1	23.8		完	完	明褐	明褐	外面工具ナデ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ　口縁部擦痕のある横ナデ
215	297住	297-19	土師	甕A	17.9				完		明褐	明褐	内外面とも工具ナデ　口縁部横ナデ
216	297住	297-16	須恵	横瓶							青灰	暗灰	外面タタキ摩滅　内面ロクロナデ後ナデ　内外面一部自然釉付着
217	297住	297-7	須恵	杯Aか	(13.4)				1/6		白灰	白灰	内外ともロクロナデ　墨書あり
218	297住	297-6	黒A	杯か椀	(19.6)				1/8		橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ摩滅　外面に墨書（五芒星か）あり
219	297住	297-4	黒A	皿B	13.4	6.9	2.9		完	完	暗赤褐	黒	内外ともロクロナデ　内面黒色処理　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整　外面に墨書（五芒星か）あり
220	297住	297-1	黒A	杯A	(13.6)	(5.6)	3.5		1/4	完	黒～暗褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　放射状ミガキ　口縁部は横ミガキ　底面回転糸切り未調整
221	297住	297-20	黒A	杯A	(15.6)				1/6		明赤褐	黒	外面ロクロナデ摩滅　内面黒色処理
222	297住	297-24	須恵	杯蓋B	(14.8)				1/6		暗青灰	暗灰	内外ともロクロナデ
223	297住	297-21	須恵	杯A		(5.6)				1/2	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面ロクロ目顕著　底面糸切り未調整
224	297住	297-22	須恵	杯A		(6.1)				1/2	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　外面ロクロ目顕著　底面糸切り未調整
225	297住	297-23	須恵	杯A	(14.4)				1/4		暗青灰	暗青灰	内外ともロクロナデ　外面ロクロ目顕著
226	297住	297-9	土師	小型甕D	(16.4)				1/10		暗褐	暗褐	外面カキ目　口縁部横ナデ　内面ロクロナデ　口縁部カキ目
227	298住	298-2	須恵	杯A	(13.2)	(4.8)	3.6		1/2	完	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整

№	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
228	298住	298-1	須恵	杯A	13.8	5.7	3.9	2/3	完	暗橙灰	暗橙灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
229	298住	298-3	黒A	杯A	(12.8)	(5.8)	4.2	1/8	完	暗褐	黒～暗褐	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ放射状　口縁部横ミガキ　底面◎
230	298住	298-4	黒A	杯A	(14.8)	(7.4)	4.0	1/4	1/3	暗褐～褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ摩滅　底面回転糸切り未調整
231	298住	298-5	黒A	杯A	(14.6)			1/4		橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ口縁部付近摩滅下半横後縦ミガキ
232	298住	298-6	土師	杯H	(14.4)			1/10		暗褐	褐	外面ミガキ摩滅　内面横ミガキ
233	298住	298-10	土師	小型甕A	(14.2)			1/12		暗褐	黒褐	外面工具ナデ後ミガキ摩滅　内面工具ナデ
234	298住	298-7	土師	小型甕D	(15.2)			1/8		褐	暗褐	外面カキ目　口縁部横ナデ　内面ロクロナデ　口縁部カキ目
235	298住	298-9	土師	小型甕D		(5.7)			3/4	黒～暗褐	暗褐	外面カキ目　内面ロクロナデ　底面静止糸切りか
236	298住	298-8	土師	小型甕		6.8			完	褐～暗褐	暗褐	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
237	298住	298-11	土師	甕B		9.2			完	褐～暗褐	褐～暗褐	外面ハケ　内面工具ナデ　底面ナデ
238	298住	298-12	土師	甕C	(18.8)			1/3		褐～暗褐	褐	外面下半ヘラケズリ　上半横ナデ　内面工具ナデ
239	298住	298-13	土師	壷		(9.6)			1/2	黒～褐	黒	内外ともミガキ
240	301住	301-1	須恵	杯A	(12.4)	(6.0)	3.3	1/3	1/3	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
241	301住	301-3	土師	小型甕D		(7.4)			一部	暗褐	暗褐	外面カキ目摩滅　内面ロクロナデ　底面回転糸切り
242	301住	301-2	土師	壷？		(7.2)			1/3	暗褐	褐	外面ナデ　内面工具ナデ
243	301住	301-4	土師	壷？		(6.4)			1/4	黒～暗褐	暗褐～橙褐	外面ナデ摩滅　内面工具ナデ
244	301住	301-5	土師	円筒形土器		(13.6)			1/6	暗褐	暗褐	外面ハケ　底部付近ナデ　内面工具ナデ
245	301住	301-6	土師	甕A						暗褐	暗黄褐	内外とも工具ナデ
246	307住	307-2	黒A？	杯A？	(13.0)	(6.3)	5.0	1/8	1/3	淡褐～灰褐	黒	外面ロクロナデ　下半・底面回転ヘラケズリ　内面黒色処理　口縁部横ミガキ
247	307住	307-1	土師	壷		(8.4)			1/2	橙褐～黒褐	橙褐	外面ナデ　内面工具ナデ　底面ナデ
248	302住	302-1	須恵	高坏						灰	灰	内外ともロクロナデ　内面上半に絞り痕あり
249	305住	305-1	土師	杯G	(12.6)			1/3		淡灰～黒褐	黒	外面下半ケズリ　上半指ナデ　内面ミガキ　口縁部横ナデ
250	溝1	溝-1	須恵	甕A	(23.0)			1/8		灰～暗灰	灰	内外ともロクロナデ
251	溝1	溝-2	須恵	甕A	(20.0)			1/10		淡灰～灰	灰	内外ともロクロナデ
252	土53	土-3	土師	小型甕B	(12.4)			1/8		淡褐～褐	淡褐～淡灰褐	外面ハケ摩滅　内面工具ナデ
253	土192	土-1	黒A	杯A	(12.6)			1/10		褐～灰褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ
254	土171	土-4	須恵	甕？	(9.4)			1/5		淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　内面一部自然釉付着
255	土159	土-5	須恵	蓋	(9.6)	6.3	3.0	1/5	2/3	灰	灰	内外ともロクロナデ　天井部外周回転ヘラ切り　内面強いナデ
256	土227	土-2	須恵	蓋	(10.4)			1/6		灰	淡灰	内外ともロクロナデ
257	土222	土-12	須恵	杯Aか	(12.6)			1/8		暗灰～灰	灰	内外ともロクロナデ
258	土222	土-11	土師	皿？	(15.2)			1/16		淡褐～褐	褐	内外ともロクロナデ
259	土139	土-13	土師	甕B		(10.3)			1/8	暗褐～灰褐	暗褐	外面ハケ　内面工具ナデ　底面ナデ
260	土218	土-10	土師	甕B		(16.4)		1/16		橙褐	褐～橙褐	外面ロクロナデ　内面カキ目
261	土218	土-9	土師	甕B		(7.0)			1/5	褐～淡灰褐	褐	外面ハケ　底部付近ケズリ　内面ロクロナデ　底面回転糸切り未調整
262	土218	土-8	須恵	杯	(14.2)			1/16		淡灰～暗灰	淡灰～暗灰	内外ともロクロナデ
263	土223	土-6	黒A	皿B？	(14.8)			1/10		淡褐～黒褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ
264	土223	土-7	須恵	杯A	(13.2)	(4.8)	3.6	1/5	1/3	黄灰	黄灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
265	175住	175-2	土師	小型丸底壷	14.6		9.2	3/4	完	暗褐	暗褐	外面口縁部ミガキ　胴部上半ハケ　下半ヘラケズリ　内面口縁部ミガキ　胴部工具ナデ
266	175住	175-1	土師	小型甕		5.6			完	褐～暗褐	褐～暗褐	内外とも工具ナデ　底面ヘラ切りか？
267	255住	255-1	土師	小型甕	11.4	(3.4)	(14.0)	2/3	完	暗褐	暗褐	外面胴部下半工具ナデ　上半ヘラケズリ　内面下半工具ナデ　上半ハケ　口縁部横ナデ

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
268	255住	255-2	土師	壷	(11.5)			2/3		褐	褐	外面摩滅　下半ヘラケズリ　内面調部工具ナデ　口縁部横ナデ
269	255住	255-3	土師	高坏		(11.6)			1/2	褐	褐	外面ミガキ　内面脚裾部ナデ　脚柱部ケズリ
270	255住	255-4	土師	高坏	17.6	(13.6)	14.1	1/2	11/12	赤～暗褐	褐～黒褐	杯部内外面ともミガキ摩滅　脚部外面ミガキ　内面工具ナデ
271	255住	255-5	土師	高坏	(17.6)	12.8	14.4	1/2	1/4	暗褐	暗褐	杯部外面ハケ後ナデ　内面ミガキ　脚部外面ミガキ　内面裾部ハケ後ナデ　脚部ナデ
272	A区検	A検-4	須恵	蓋						黄灰	黄灰	外面回転ヘラケズリ　つまみ部貼り付け後ナデ　内面ロクロナデ
273	A区検	A検-1	黒A	椀		(3.0)			1/2	橙褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
274	A区検	A検-3	灰釉	椀	(13.5)			1/16		淡黄灰	淡黄灰	内外ともロクロナデ　施釉
275	A区検	A検-5	須恵	短頸壷B	(8.3)			1/12		淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　口縁部横ナデ
276	A区検	A検-2	土師	高坏						褐～橙褐	黒褐	外面ミガキ　内面ケズリ
277	A区検	A検-7	土師	杯A		(6.7)			1/6	淡灰褐	黒	外面ヘラケズリ　内面黒色処理　ミガキ
278	A区検	A検-8	黒A	鉢	(27.7)			1/3		暗橙褐～暗灰褐	褐～暗灰褐	内外とも摩滅　内面黒色処理か
279	A区検	A検-6	須恵	甕A	(25.0)			1/12		茶灰	灰	内外ともロクロナデ
280	C区検	C検-2	黒A	杯Aか	(13.6)			1/10		淡灰褐～淡褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ
281	C区検	C検-3	黒A	杯Aか	(14.5)			1/12		淡褐～黒	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　口縁部横ミガキ、以下縦ミガキ
282	C区検	C検-9	須恵	杯蓋B	(14.2)			1/12		灰～暗灰	灰	内外ともロクロナデ
283	C区検	C検-6	須恵	杯A		(4.8)			1/8	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
284	C区検	C検-4	須恵	杯A		(6.1)			2/3	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
285	C区検	C検-1	須恵	杯A	(11.4)			1/8		暗褐～灰褐	暗褐～灰褐	内外ともロクロナデ
286	C区検	C検-5	須恵	杯A	(12.6)			1/5		淡灰褐～黒褐	黒	内外ともロクロナデ
287	C区検	C検-8	須恵	壷？						灰～暗灰	灰～暗灰	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
288	C区検	C検-13	須恵	壷						暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ
289	C区検	C検-12	灰釉	壷						淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　外面施釉
290	C区検	C検-10	灰釉	皿	(14.4)			1/12		淡黄緑	淡黄緑	外面回転ヘラケズリ　口縁部ロクロナデ　内面ロクロナデ
291	C区検	C検-7	黒A	椀		(6.1)			1/3	淡褐～黒褐	黒	外面ロクロナデ　内面黒色処理　ミガキ　付高台後ナデ　底面回転糸切り未調整
292	C区検	C検-14	土師	円筒形土器		(12.2)			1/8	暗灰褐	暗灰褐	外面ハケ　底部付近横ナデ　内面横ナデ後ケズリ
293	C区検	C検-11	須恵	甕D								外面タタキ目　突帯部貼り付け後ナデ
294	C区検	C検-16	土師	甕	(13.1)			1/16		灰褐	灰褐	外面ナデ　内面カキ目
295	C区検	C検-15	土師	甕B	(23.8)			1/6		灰褐	淡灰褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面ナデ　口縁部カキ目
296	B区検	B検-3	須恵	杯蓋A	(10.8)			1/24		暗灰	灰～暗灰	
297	B区検	B検-4	須恵	杯A	(10.9)			1/12		淡灰	淡灰	外面横ナデ　下半回転ヘラケズリ　内面ロクロナデ
298	B区検	B検-6	須恵	杯A	(12.5)	(5.6)	3.8	一部	1/4	淡灰～淡黄灰	淡黄灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整
299	B区検	B検-1	土師	杯	(14.2)			1/12		淡褐	淡褐～褐	内外ともロクロナデ
300	B区検	B検-2	土師	杯J	(11.8)			1/10		淡灰褐～灰褐	淡灰褐～灰褐	外面下半ケズリ　上半ミガキ摩滅　内面横ミガキ
301	B区検	B検-12	須恵	甑						暗灰	暗灰	
302	B区検	B検-8	須恵	長頸壷A	(7.9)			1/4		淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ
303	B区検	B検-7	須恵	壷？		(11.5)			1/8	暗灰	暗灰	内外ともロクロナデ　付高台後ナデ　高台部外面に自然釉付着
304	B区検	B検-9	土師	甕A	(18.6)			1/10		橙褐	橙褐	内外とも工具ナデ　口縁部横ナデ
305	B区検	B検-10	土師	甕B	(22.1)			1/6		淡褐～褐	淡褐～黒褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ
306	B区検	B検-5	須恵	甕？		(15.6)		1/16		淡灰	淡灰褐	内外ともロクロナデ
307	D区検	D検-2	須恵	杯	(9.1)			1/8		灰～暗灰	淡灰	内外ともロクロナデ

No.	出土地点	実測番号	種別	器種	法量			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴等
					口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面	
308	D区検	D検-3	須恵	杯A		(6.6)			1/5	灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転ヘラケズリ
309	E区検	E検-3	須恵	杯A		(5.6)			1/3	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転ヘラケズリ
310	E区検	E検-2	須恵	杯A？	(12.4)			1/12		淡灰白	淡灰白	内外ともロクロナデ
311	E区検	E検-1	須恵	杯A		(5.4)			完	淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ　底面回転糸切り未調整　底面に墨書（判読不能）あり
312	D区検	D検-4	須恵	甕	(10.1)			一部		淡灰	灰	内外ともロクロナデ
313	283住	283-2	土師	高坏						橙褐～暗褐	橙褐	外面ミガキ　内面工具ナデ
314	D区検	D検-1	土師	高坏						橙褐～灰褐	橙褐	外面ミガキ摩滅　内面摩滅　一部ハケ
315	D区検	D検-6	土師	高坏？	(20.5)			1/10		淡灰褐～黒褐	黒褐	内外ともミガキ
316	E区検	E検-4	須恵	短頸壺D	(17.0)			1/8		灰～淡灰	淡灰白～淡灰	内外ともロクロナデ
317	E区検	E検-5	須恵	鉢A？	(20.4)			1/12		淡灰	淡灰白	内外ともロクロナデ
318	D区検	D検-8	須恵	甕	(30.6)			1/16		淡灰	淡灰	内外ともロクロナデ
319	E区検	E検-6	土師	甕B	(19.8)			1/8		橙褐	橙褐	外面ハケ　口縁部横ナデ　内面工具ナデ　口縁部ハケ後ナデ
320	D区検	D検-5	土師	甕	(18.4)			1/8		淡黄褐	淡黄褐	外面ハケ後ナデ　内面工具ナデ
321	D区検	D検-7	土師	内耳鍋		(21.0)			1/10	淡黒褐	淡黒褐	内外ともロクロナデ　外面底部付近回転ヘラケズリ　底面回転ヘラケズリか

Ⅵ 調査のまとめ

今回の調査地点は、出川南遺跡の南西部分に相当し、東西に長い調査区を設定することができた。かなりの広範囲で後世の攪乱が及んでおり、今回の調査成果をもって各時期の集落の構成を厳密にたどることは困難である。しかしながら、おおよその集落の変遷の状況を窺うことは可能である。以下、各時期ごとに集落の変遷をたどってみたい。

(1) 古墳時代中期

古墳時代中期の明確な遺構は確認することができなかったが、遺物集中地点を2箇所確認することができた。共に出土した遺物は完形もしくはそれに近いものが多く、近在に該期集落の存在する可能性が高い。出川南遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の集落がこれまで確認されているほか、中期古墳である平田里古墳群も存在しており、これらとの関連の中で今後追及すべき課題であろう。

(2) 古墳時代後期

本遺跡の第4次調査地点では、該期の大規模な集落が確認されている。今回の調査では、ある程度明確に住居址として把握できるものとして157・191～193・290・297住の6軒がある。時期的には後期でも後半（第3・4段階）ものが5軒と大半を占める。これら住居址は調査区北東に5棟がまとまって分布し、157住のみが西側に離れて存在する。今回の調査地点は第4次調査地点から150m程度南に位置し、その間の状況が把握できていないものの、該期にかなり広い範囲にわたって集落が展開していたものと思われる。該期の住居址の中では297住から遺物が多く出土しており、良好な資料と思われる。

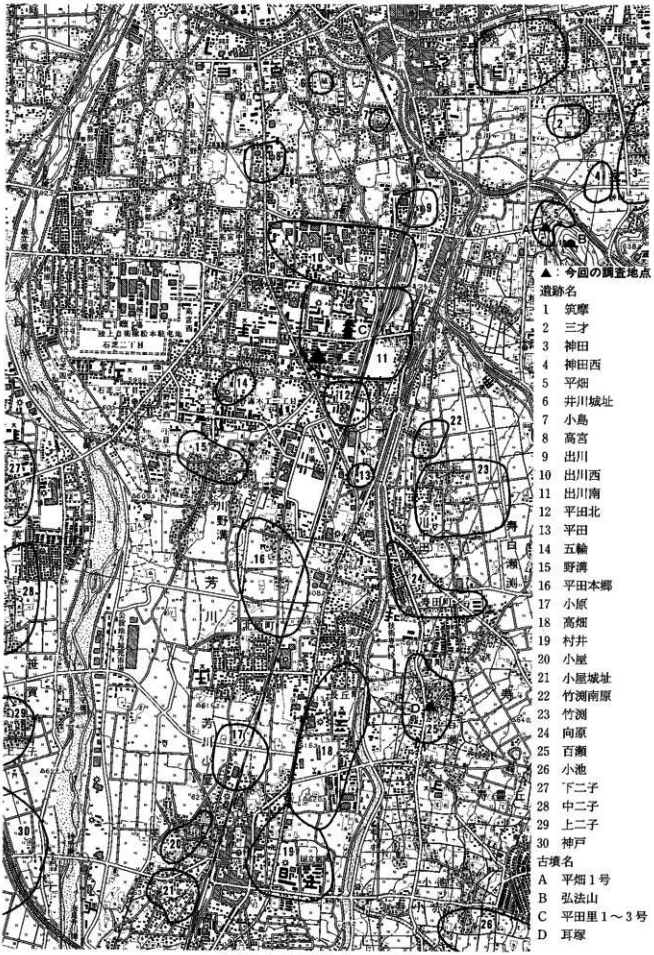
(3) 奈良時代（古代1～4期）

該期の住居址として158・176・253・263・277・281・286住の6軒が該当する。時期的には281住を除き前半（1・2期）に帰属している。分布状況は、調査地点の中ほどから西側に点在する状況を呈しているが、263住のみやや離れて西側に存在する。158住からは多くの遺物が出土しており、該期の良好な資料である。

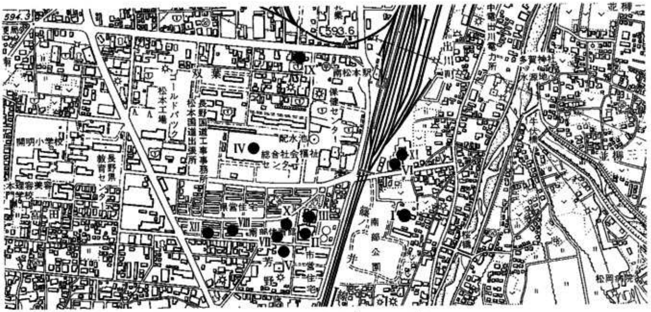
(4) 平安時代前期（古代5～8期）

該期の住居址として154・163・164・165・168・180・184・190・285・291・292・298住の12軒がある。時期的には5～6期が285住1軒で、他は7～8期に帰属する。分布状況は調査区東半に偏っている。特に8期のものは東半でも南側にしか見られない。各時期に同時に存在した住居址は多くて8軒程度と思われ、7期を中心として軒数が多いようである。該期の遺物としては、163住から黒笹14号窯式の灰釉陶器椀が、また伴う遺構を確認できなかったが、297住からは五芒星の墨書のある黒色土器A椀・皿が出土しており、注目される。

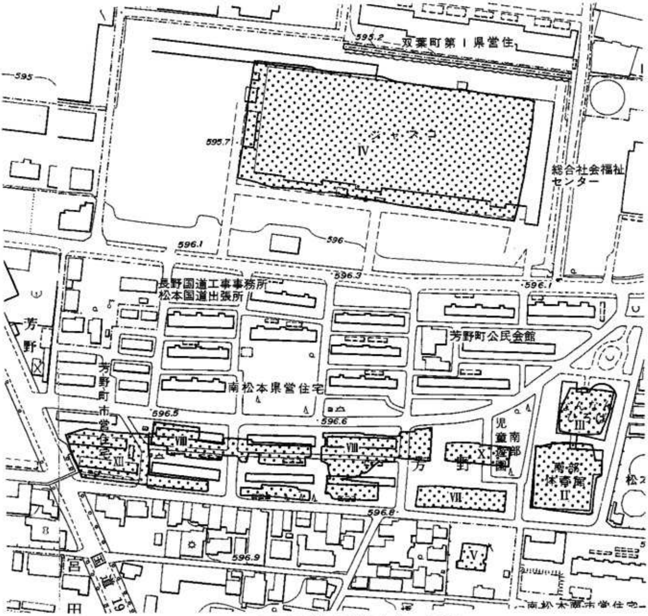
最後となったが、調査実施にあたり多大なる御理解と御協力を頂いた長野県住宅部及び地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。



第２図　周辺の遺跡（１：25000）

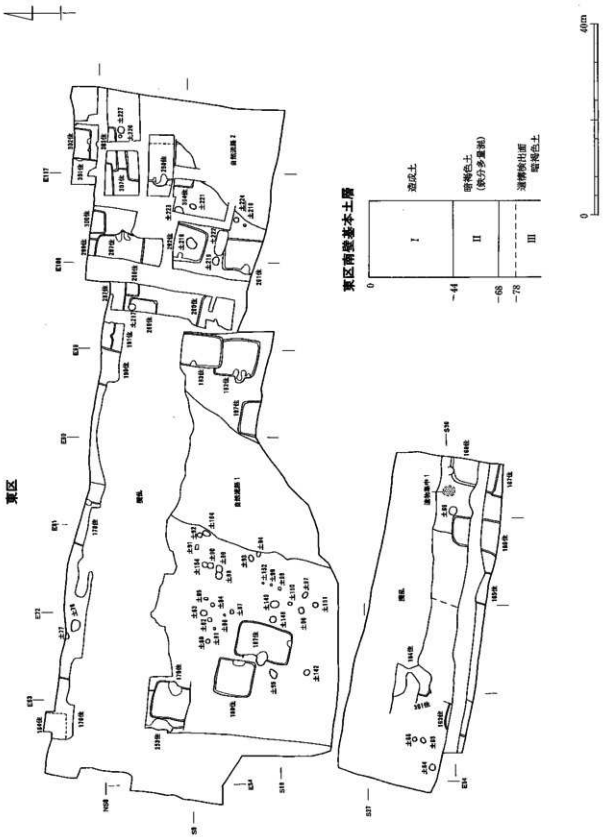


第3図　過去の調査地点（1：10000）

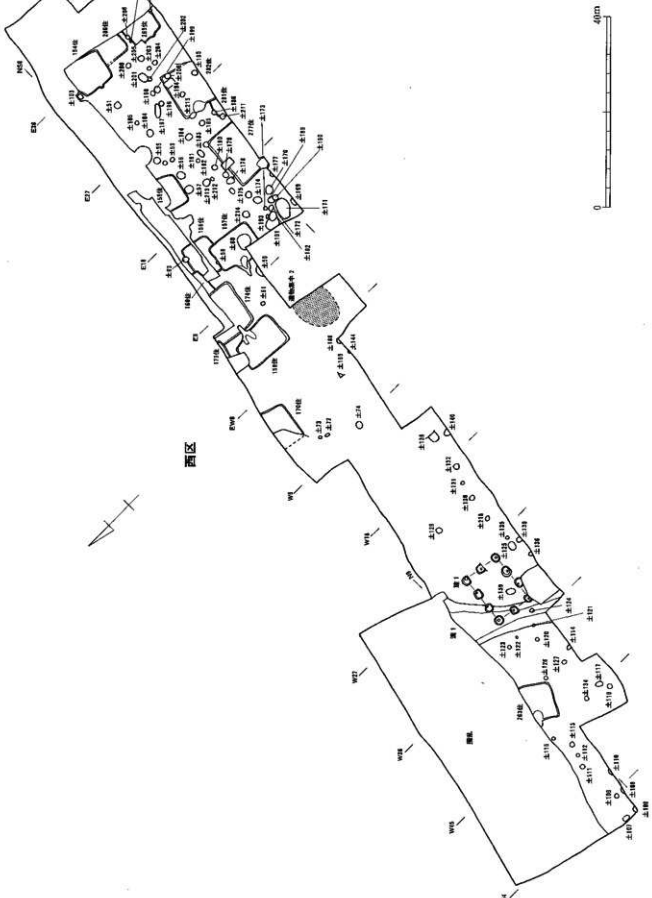


第4図　出川南遺跡西側の調査地点（1：2500）

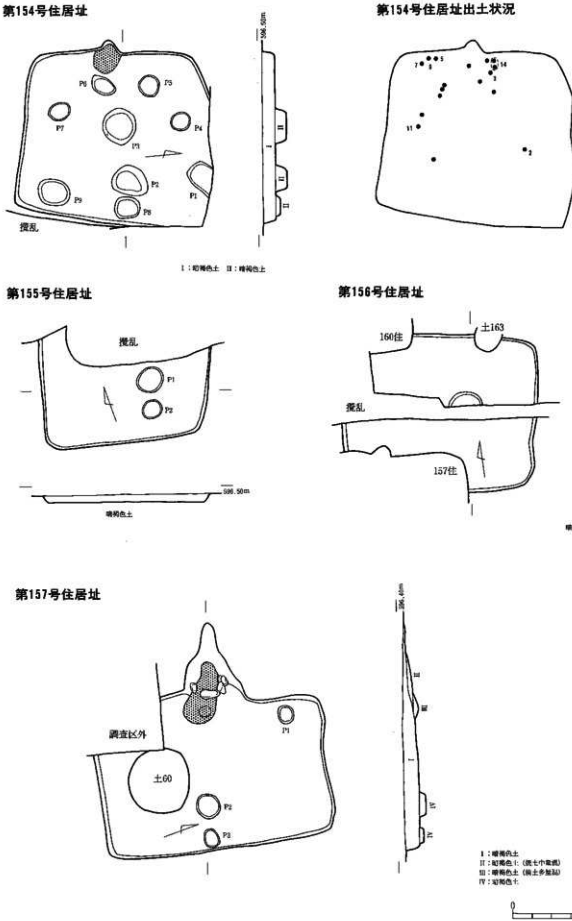
第5図　調査地区配置図（S＝1：800）



第6図　遺構配置図 (1)

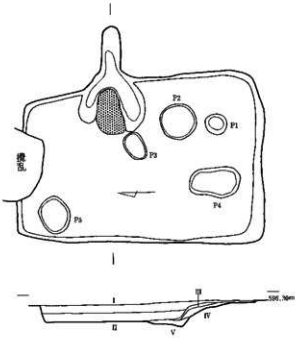


第7図　遺構配置図 (2)

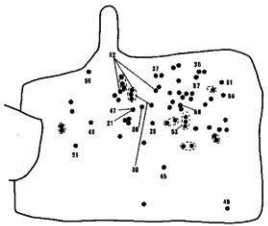

第154号住居址
P6
P5
P7
P4
P3
P2
P1
P9
P8
撹乱
106.50m
Ⅰ：暗褐色土　Ⅱ：暗褐色土
第154号住居址出土状況
第155号住居址
撹乱
P1
P2
106.50m
暗褐色土
第156号住居址
160住
土163
撹乱
157住
106.50m
暗褐色土
第157号住居址
調査区外
土60
P1
P2
P3
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：紫褐色土（焼土中敷面）
Ⅲ：暗褐色土（焼土多混入）
Ⅳ：紫褐色土
0
2m

第8図　遺　構(1)

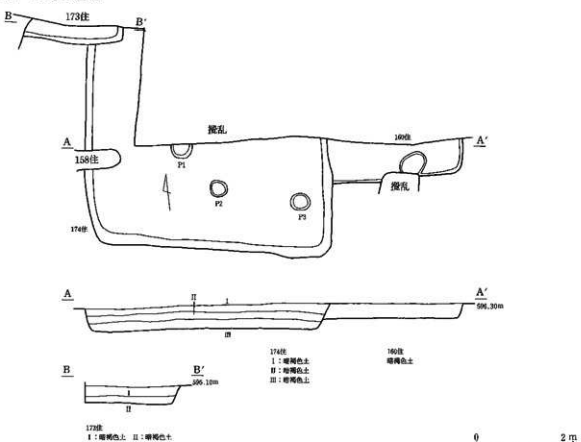
第158号住居址



第158号住居址出土状況

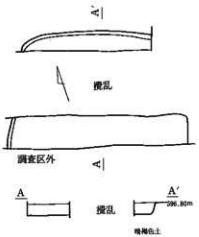


第160・173・174号住居址

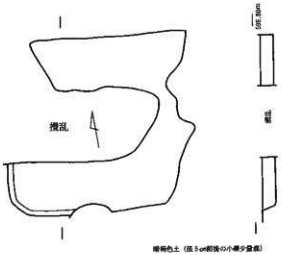


第9図　遺　構(2)

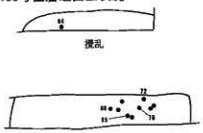
第163号住居址



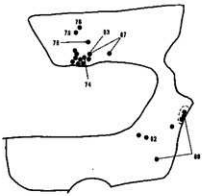
第164号住居址



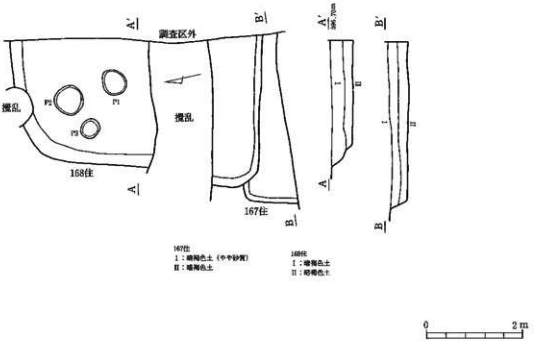
第163号住居址出土状況



第164号住居址出土状況

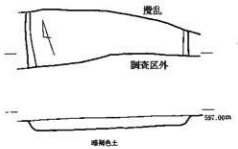


第167・168号住居址

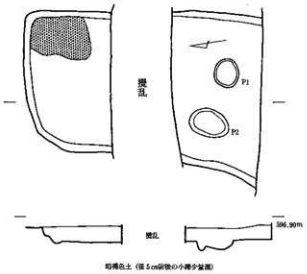


第10図　遺　構 (3)

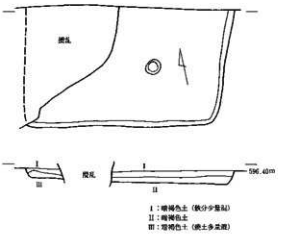
第165号住居址



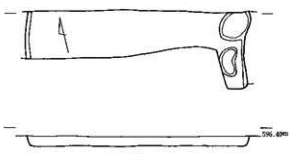
第166号住居址



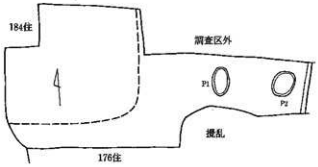
第170号住居址



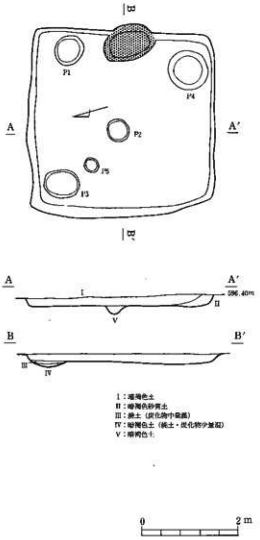
第176号住居址



第176・184号住居址

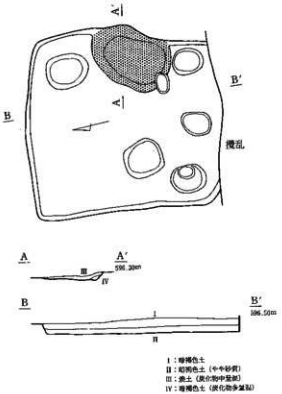


第180号住居址

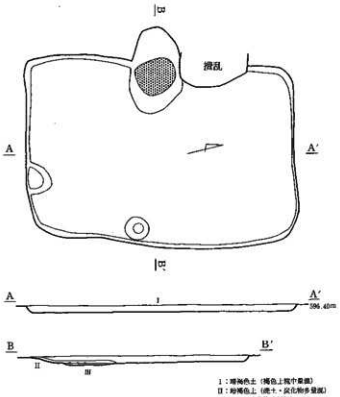


第11図　遺　構（4）

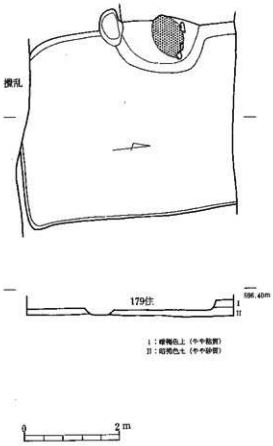
第179号住居址



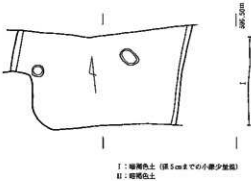
第187号住居址



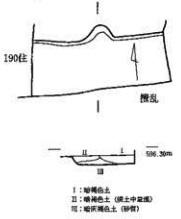
第253号住居址



第190号住居址

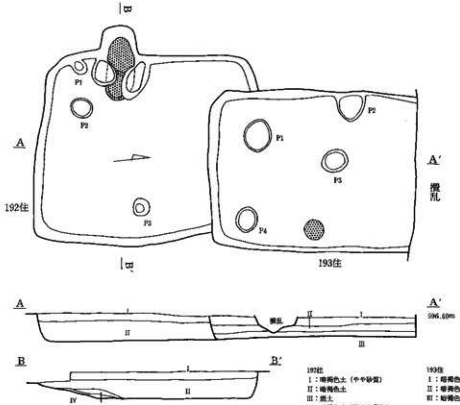


第191号住居址

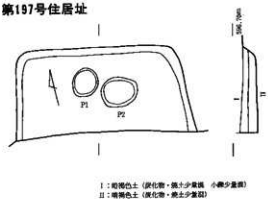


第12図　遺　構（5）

第192・193号住居址

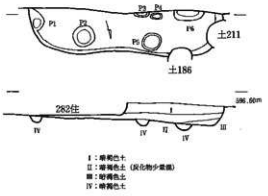


第197号住居址



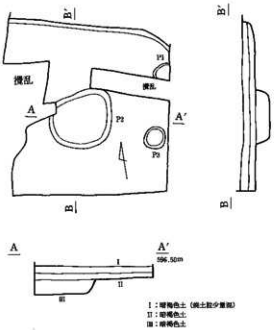
第263号住居址

第281号住居址

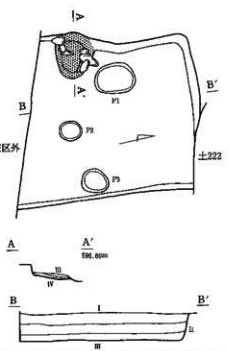


第13図　遺　　構（6）

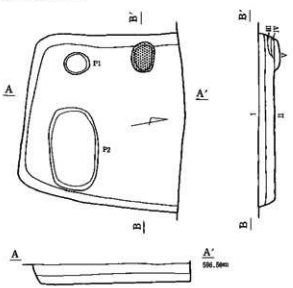
第290号住居址



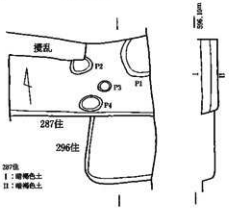
第291号住居址



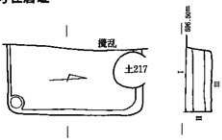
第292号住居址



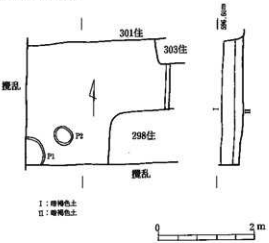
第287・296号住居址



第288号住居址

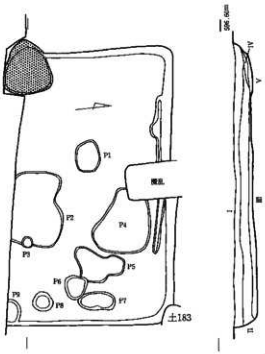


第307号住居址

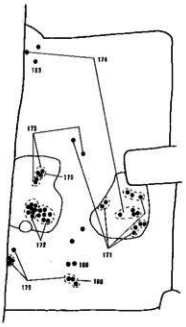


第14図　遺　構（7）

第277号住居址

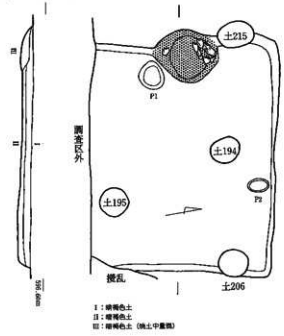


第277号住居址出土状況



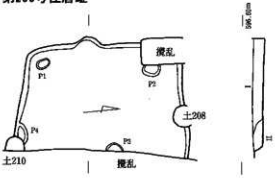
Ⅰ：暗褐色土（炭化物少量混　炭色土粒中量混）
Ⅱ：暗褐色土（炭化物・焼土少量混　炭色土粒中量混）
Ⅲ：暗褐色土（炭色土粒中量混）
Ⅳ：暗褐色土（焼土多量混　炭化物少量混）
Ⅴ：焼土（炭化物・暗褐色土粒・小礫少量混）

第282号住居址



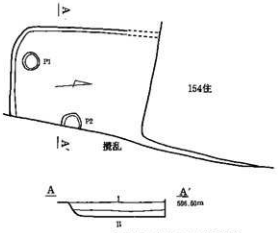
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土
Ⅲ：暗褐色土（焼土中量混）

第285号住居址



Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土（焼土・炭化物中量混）

第286号住居址

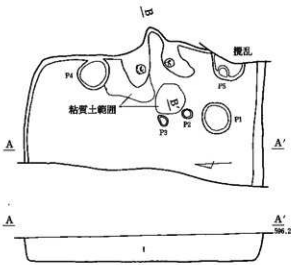


Ⅰ：暗褐色土（砂質　焼土・炭化物少量混）
Ⅱ：暗褐色土（焼土・炭化物少量混）

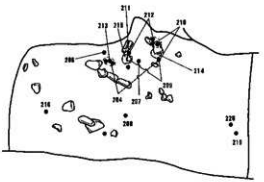
0　2m

第15図　遺　構（8）

第297号住居址

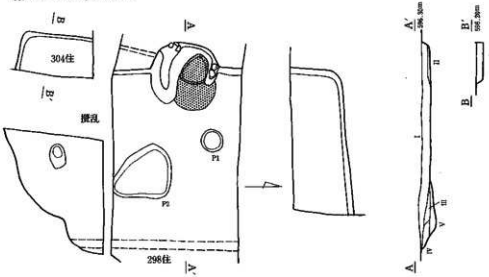


第297号住居址出土状況

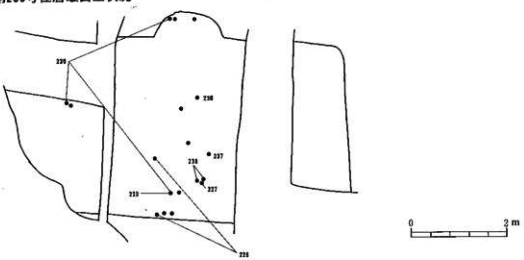


I：暗褐色土（焼土・炭化物少量混）
II：褐色粘質土（焼土塊中量混　炭化物少量混）
III：暗褐色土（褐色軟土塊少量混）
IV：暗褐色土（砂質　焼土・炭化物少量混）
V：暗褐色土（焼土塊多量混　炭化物少量混）

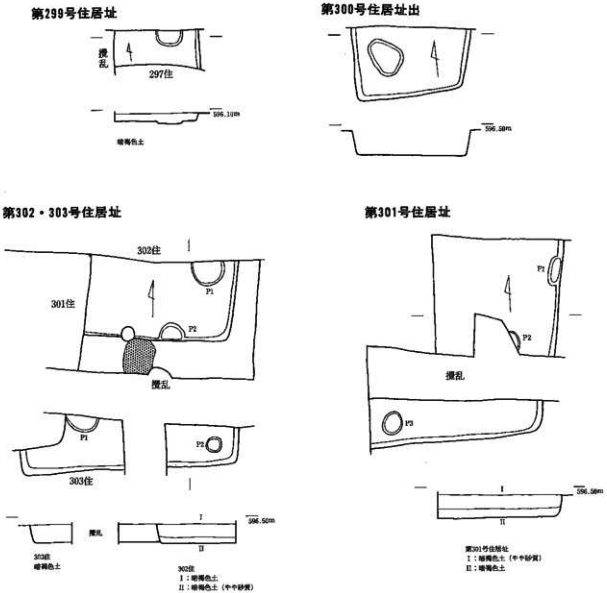
第298・304号住居址



第298号住居址出土状況

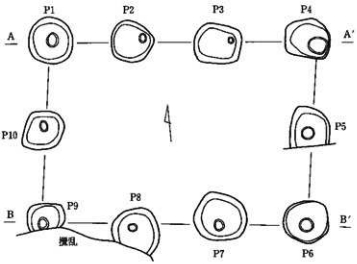


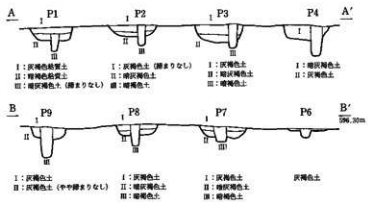
第16図　遺　構(9)

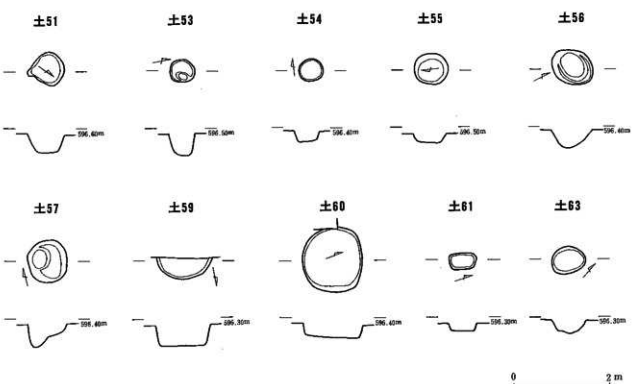

第299号住居址
撹乱
297住
396.10m
暗褐色土
第300号住居址出
396.50m
第302・303号住居址
302住
301住
P1
P2
撹乱
P1
P2
303住
撹乱
I
II
396.50m
303住
暗褐色土
302住
I：暗褐色土
II：暗褐色土（やや砂質）
第301号住居址
P1
P2
撹乱
P3
I
II
396.50m
第301号住居址
I：暗褐色土（やや砂質）
II：暗褐色土
遺物集中出土地点 1
S36
S37
遺物集中出土地点 2
S3
S3
0
2 m

第17図　遺　　構 (10)

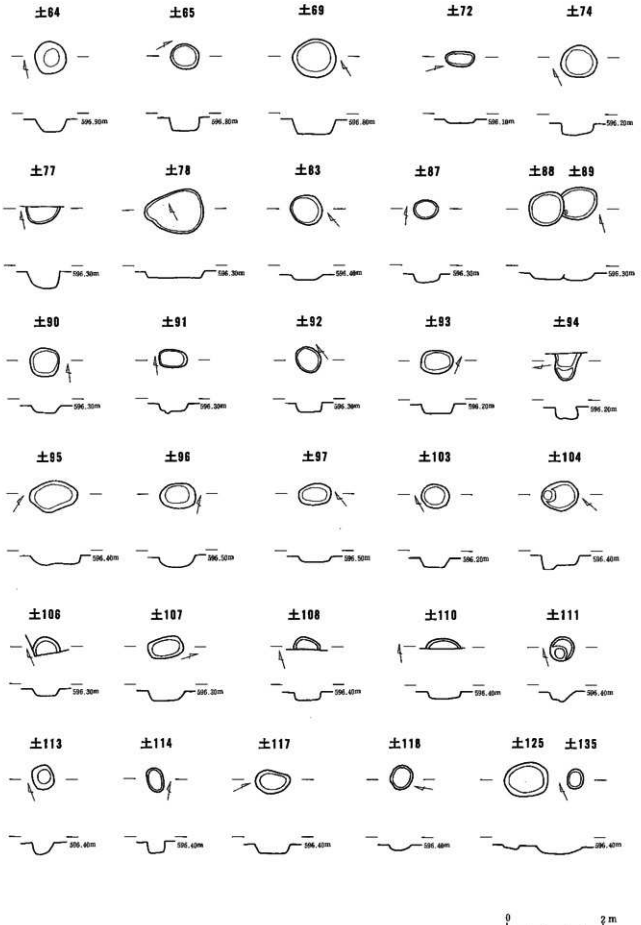
第１号建物址



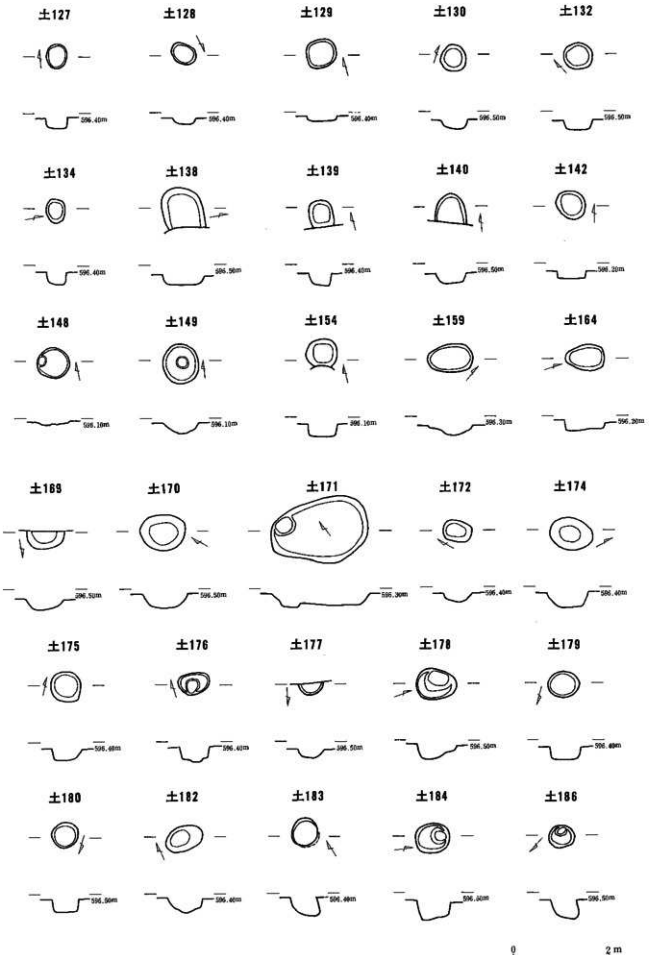




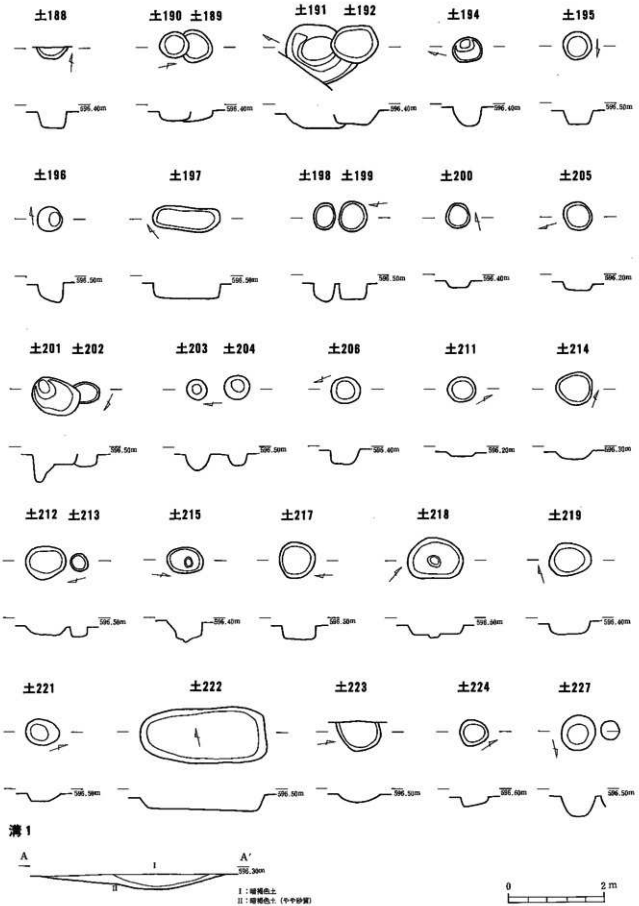
第18図　遺　構 (10)


±64
±65
±69
±72
±74
±77
±78
±83
±87
±88 ±89
±90
±91
±92
±93
±94
±95
±96
±97
±103
±104
±106
±107
±108
±110
±111
±113
±114
±117
±118
±125 ±135
0
2m

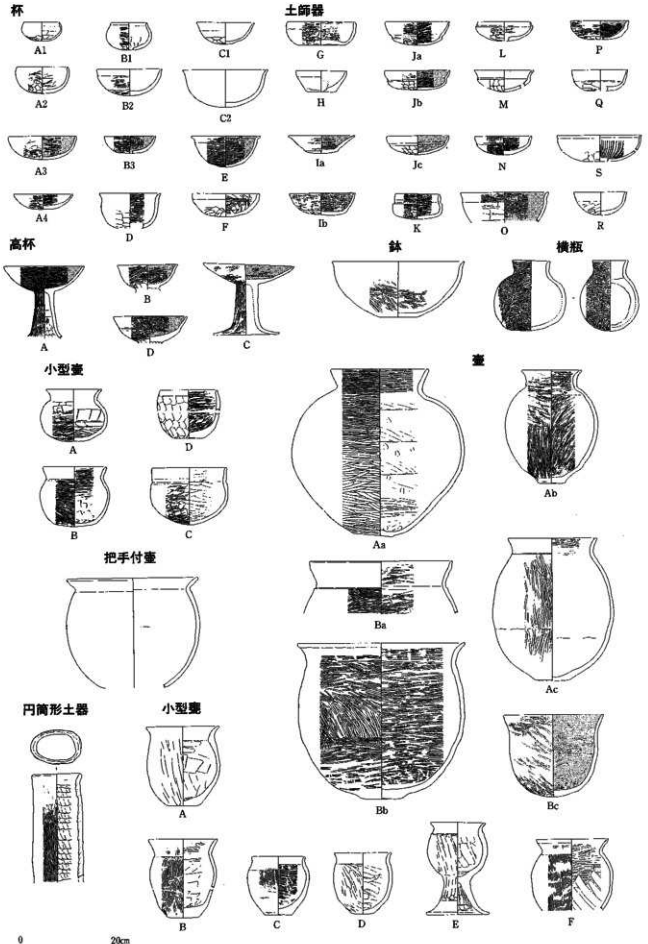
第19図 遺　構 (12)


土127
596.40m
土128
596.40m
土129
596.40m
土130
596.50m
土132
596.50m
土134
596.40m
土138
596.30m
土139
596.40m
土140
596.50m
土142
596.20m
土148
596.10m
土149
596.10m
土154
596.10m
土159
596.30m
土164
596.30m
土169
596.50m
土170
596.50m
土171
596.30m
土172
596.40m
土174
596.40m
土175
596.40m
土176
596.40m
土177
596.50m
土178
596.50m
土179
596.40m
土180
596.50m
土182
596.40m
土183
596.40m
土184
596.40m
土186
596.50m
0
2 m

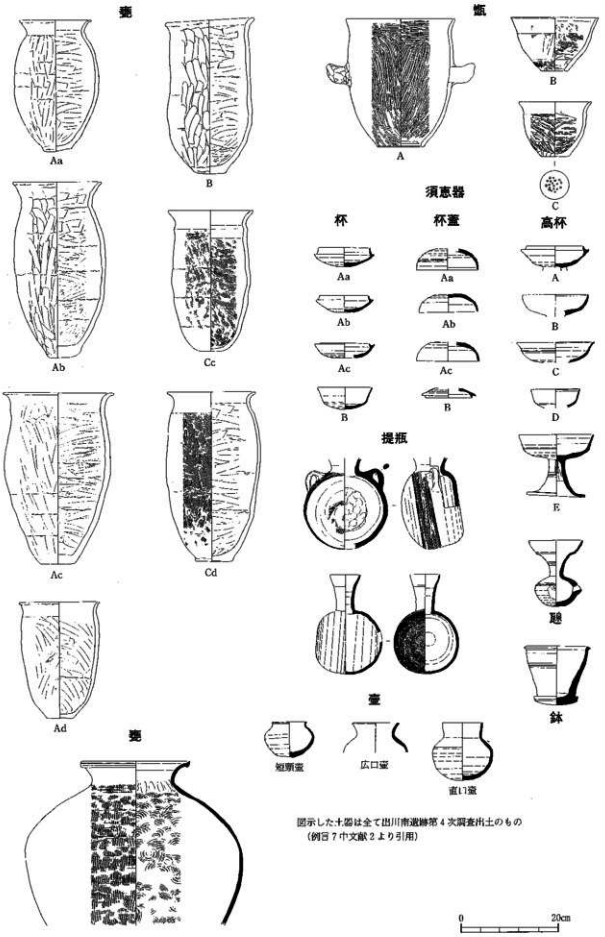
第20図　遺　構 (13)


±188
±190 ±189
±191 ±192
±194
±195
±196
±197
±198 ±199
±200
±205
±201 ±202
±203 ±204
±206
±211
±214
±212 ±213
±215
±217
±218
±219
±221
±222
±223
±224
±227
溝1
A
A′
Ⅰ
Ⅱ
Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土（やや砂質）
0
2m

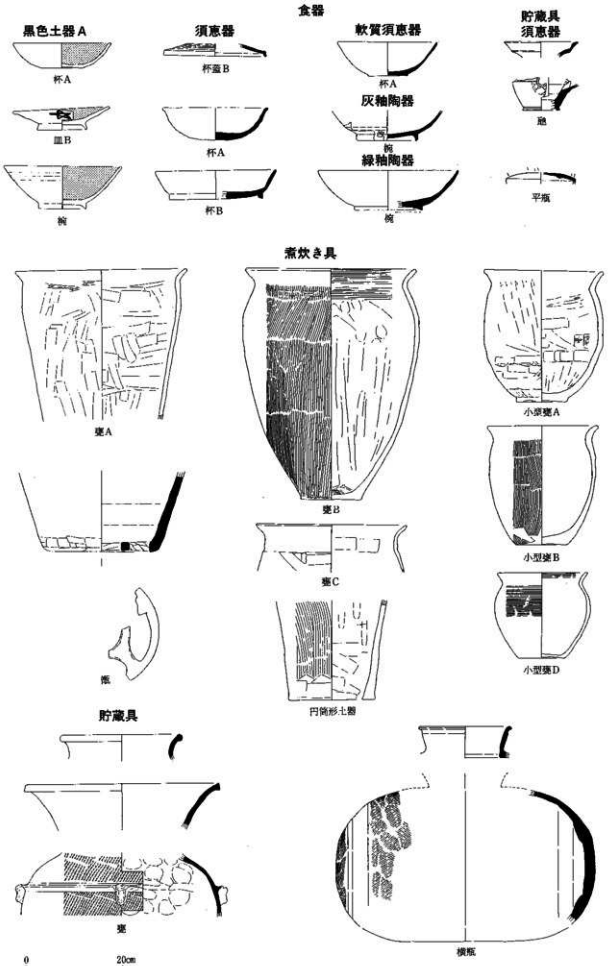
第21図　遺　構 (14)



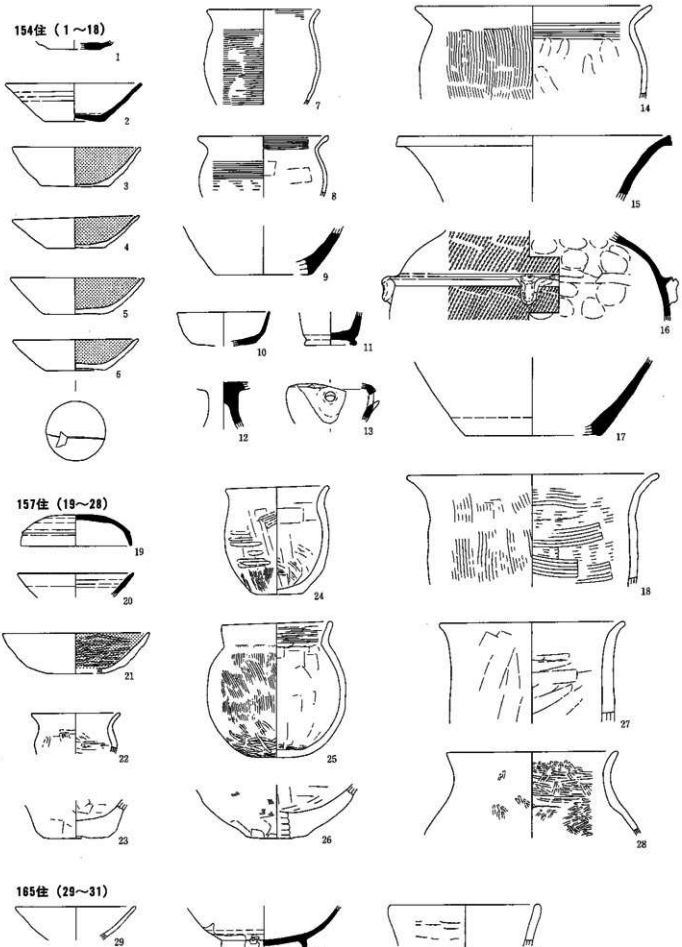
第22図　古墳時代後期の土器・陶器一覧 (1)



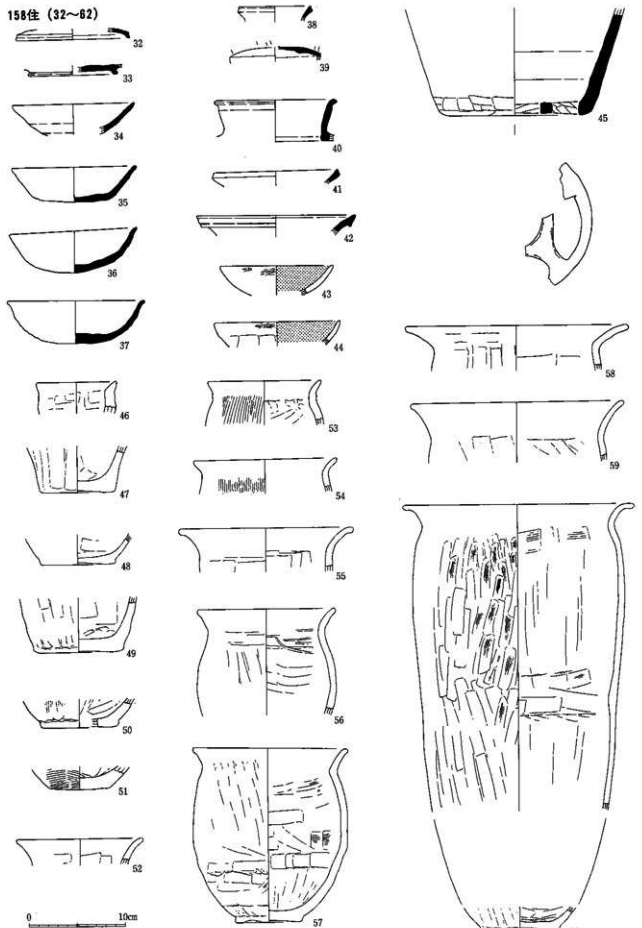
第23図　古墳時代後期の土器・陶器一覧（2）



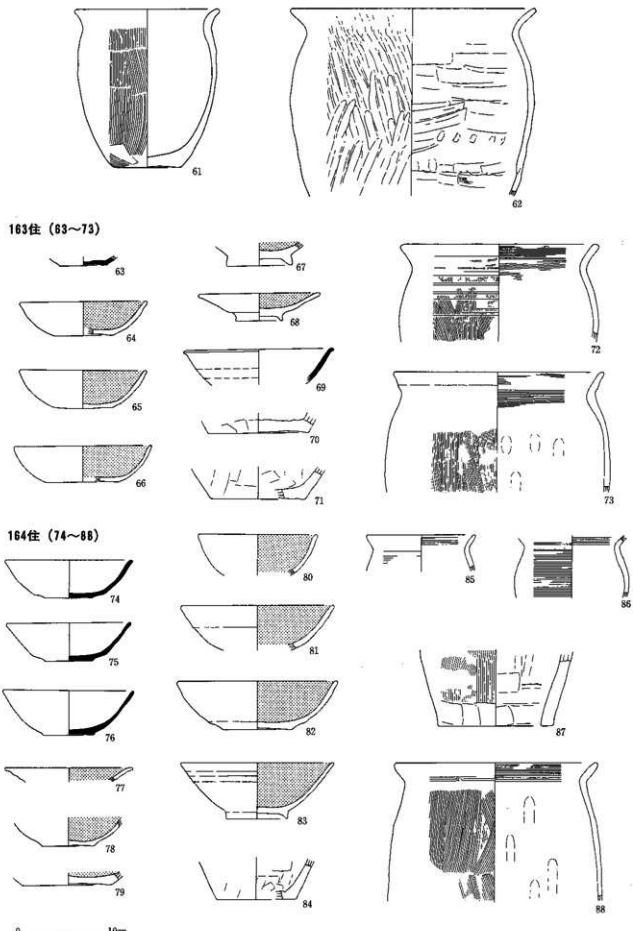
第24図　奈良・平安時代の土器・陶器一覧



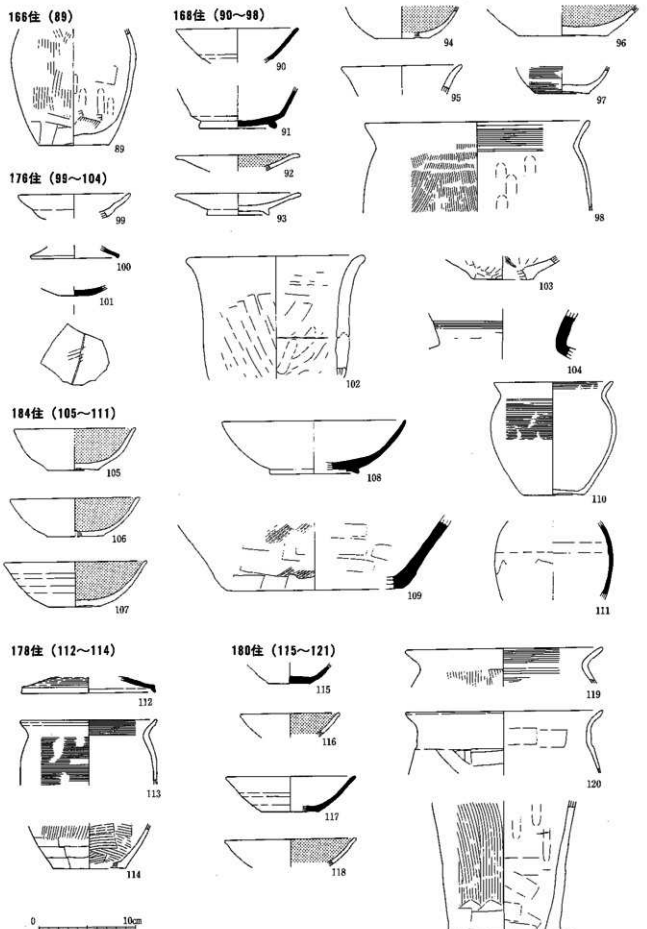
第25図　遺　物（1）


158住（32～62）
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
10cm

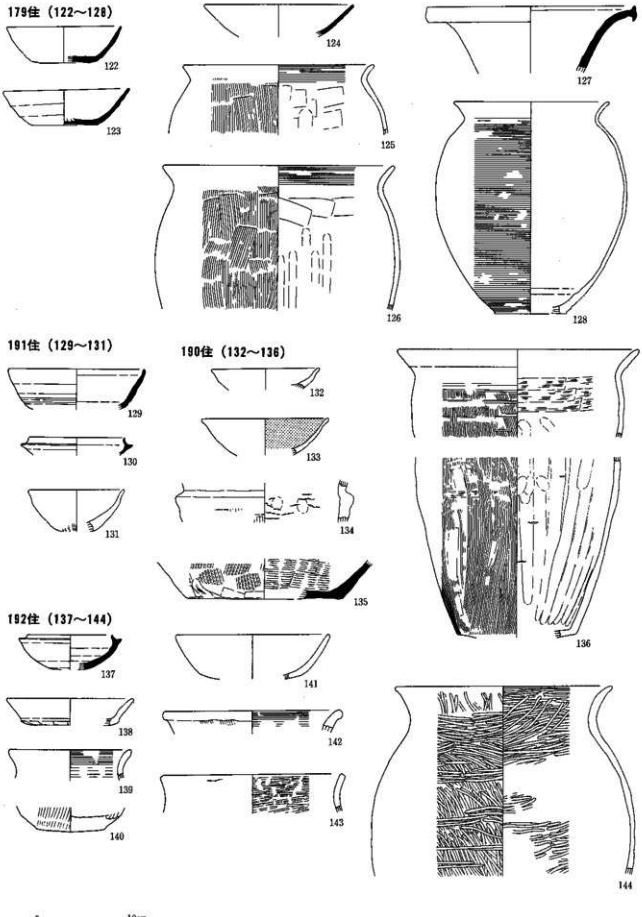
第26図　遺　物（2）


61
62
163住（63～73）
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
164住（74～88）
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
10cm

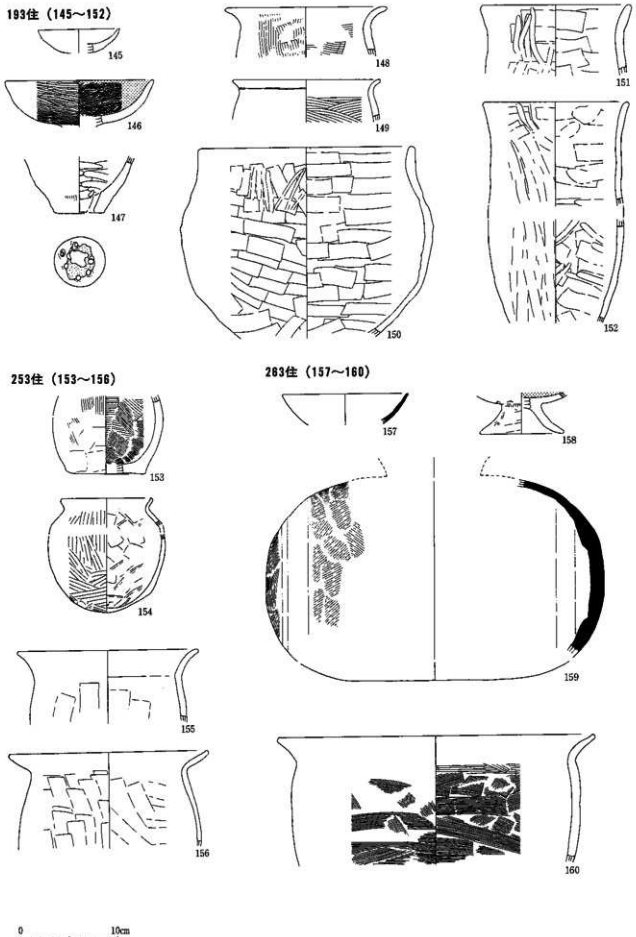
第27図　遺　物（3）


166住（89）
168住（90～98）
176住（99～104）
184住（105～111）
178住（112～114）
180住（115～121）
0
10cm

第28図　遺　物（4）


179住（122～128）
122
123
124
125
126
127
128
191住（129～131）
129
130
131
190住（132～136）
132
133
134
135
136
192住（137～144）
137
138
139
140
141
142
143
144
0
10cm

第29図　遺　物（5）


193住（145～152）
145
146
147
148
149
150
151
152
253住（153～156）
153
154
155
156
283住（157～160）
157
158
159
160
0
10cm

第30図　遺　物（6）

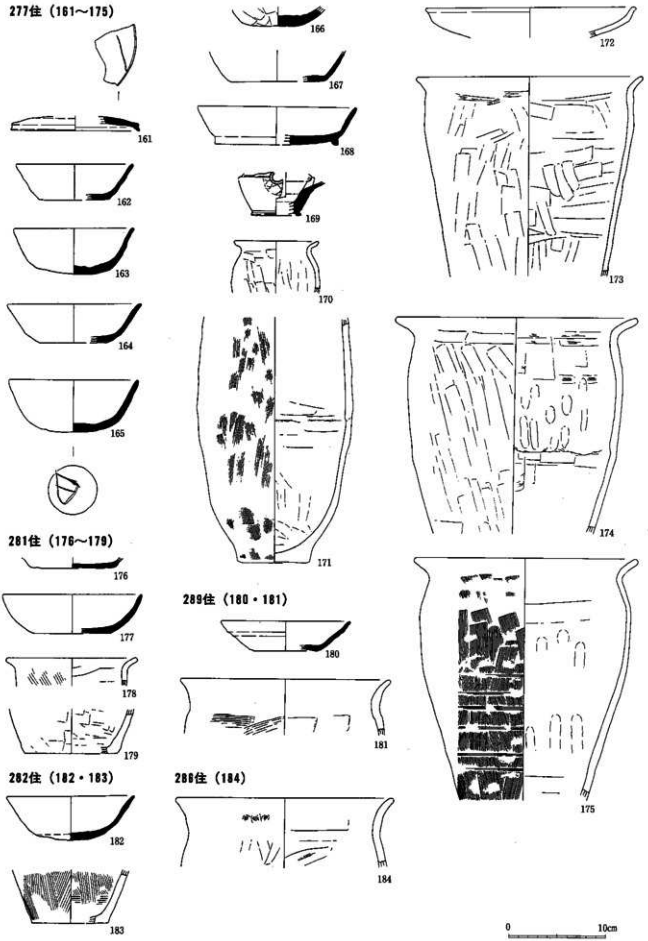
277住（161～175）

281住（176～179）

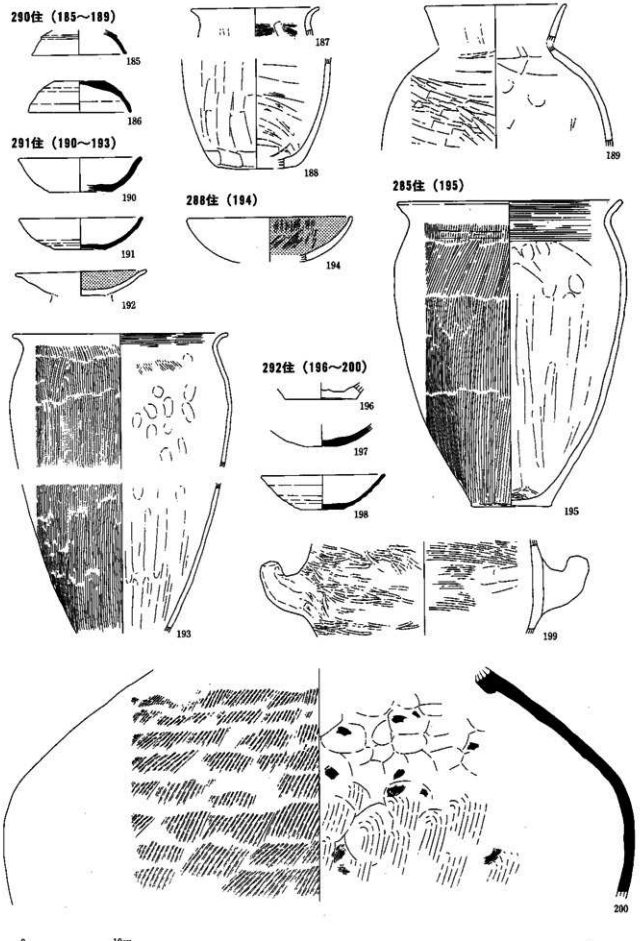
282住（182・183）

289住（180・181）

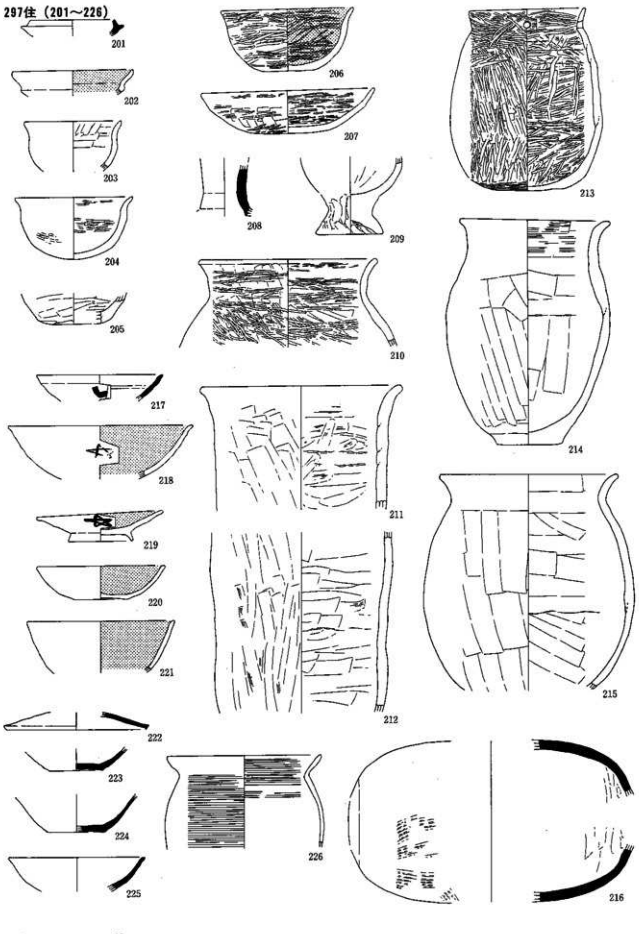
288住（184）



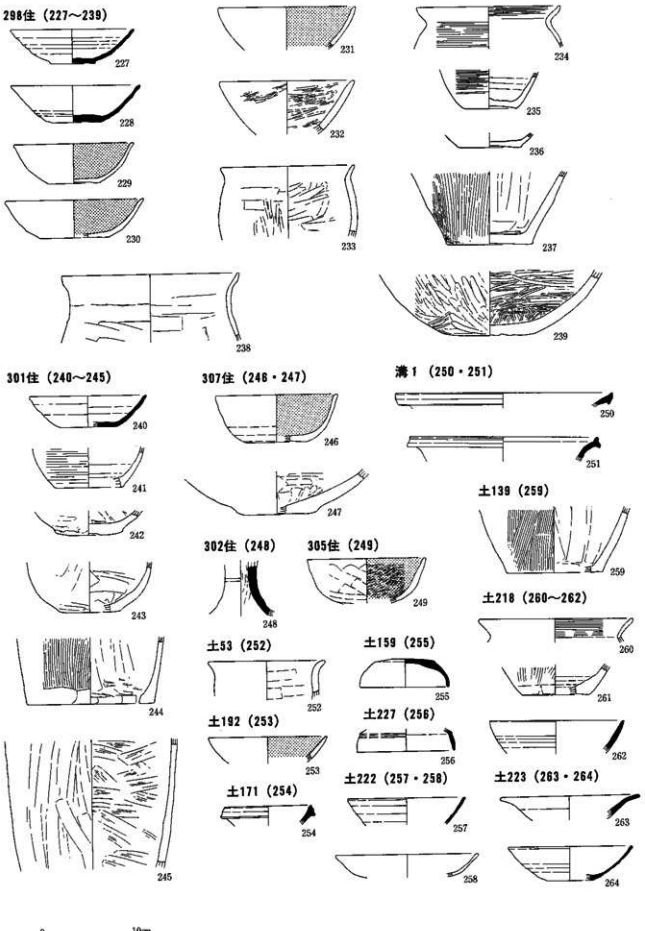
第31図　遺　物（7）


290住（185～189）
185
186
187
188
189
291住（190～193）
190
191
192
288住（194）
194
285住（195）
195
292住（196～200）
196
197
198
193
199
290
0
10cm

第32図　遺　物(8)

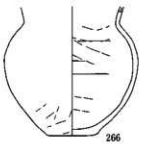

297住（201～226）
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
0
10cm

第33図　遺　物（9）

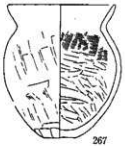

298住（227～239）
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
301住（240～245）
240
241
242
243
244
245
307住（246・247）
246
247
溝1（250・251）
250
251
土139（259）
259
302住（248）
248
305住（249）
249
土218（260～262）
260
261
262
土53（252）
252
土159（255）
255
土192（253）
253
土227（256）
256
土171（254）
254
土222（257・258）
257
258
土223（263・264）
263
264
0
10cm

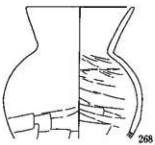
第34図　遺　物 (10)

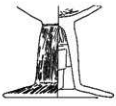
遺物集中出土地点１（265・266）

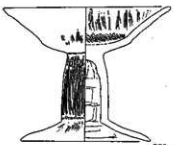


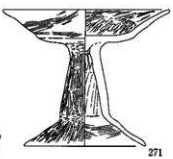
遺物集中出土地点２（267～271）



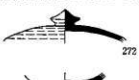


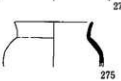


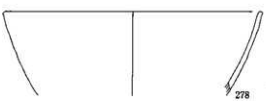


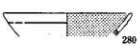


東区北東検出面（272～279）





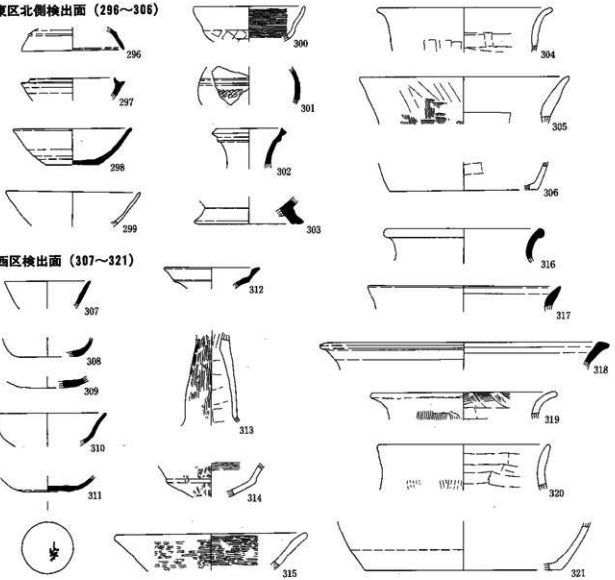




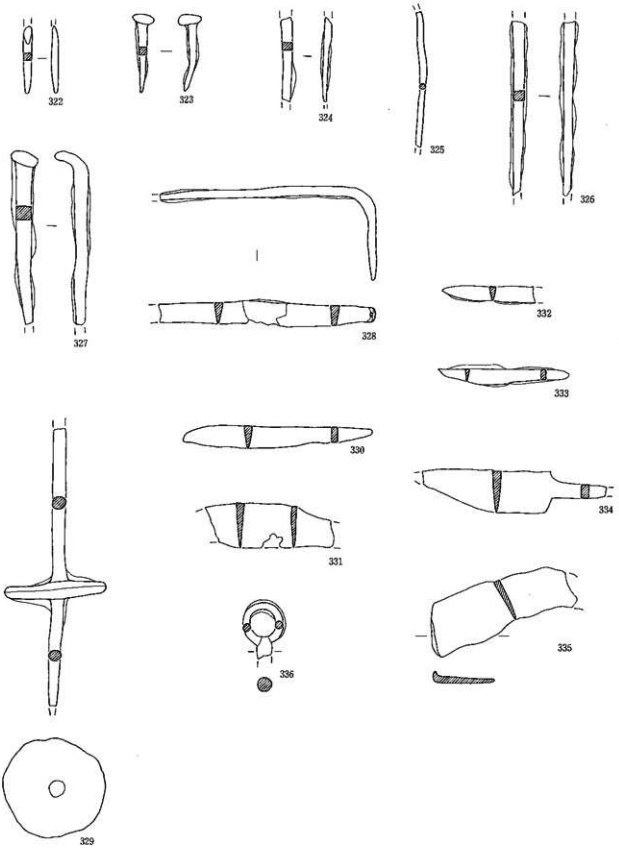
東区南側検出面（280～295）

第35図　遺　物（1）

東区北側検出面（296～306）



第36図　遺　物 (12)



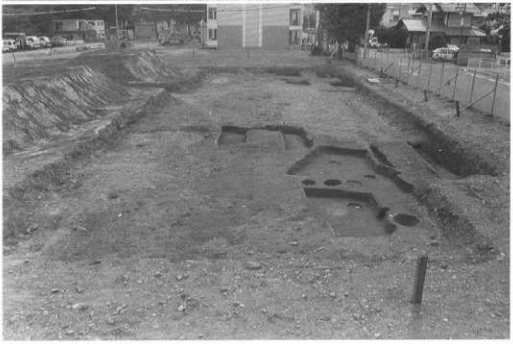
第37図　遺　物 (13)

写真図版

東地区東側（東から）

東地区西側（南から）

東地区南側（西から）



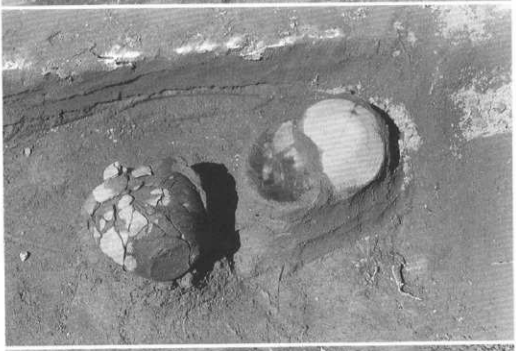
西地区東側
（北半　東から）

西地区東側
（南半　東から）

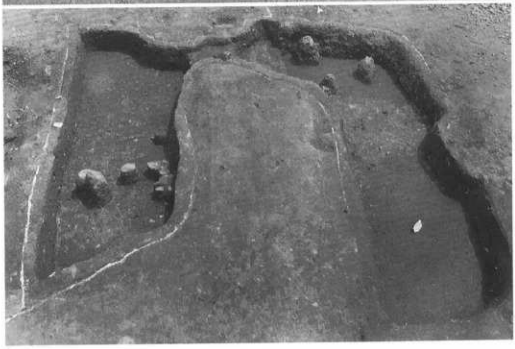
西地区西側（東から）

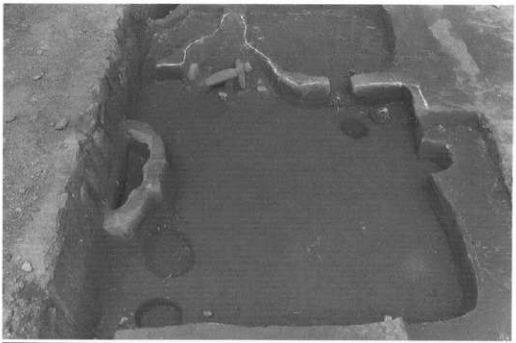
第154号住居址完掘状況
（東から）

第154号住居址出土状況
（カマド南側　東から）



第164号住居址出土状況
（西から）



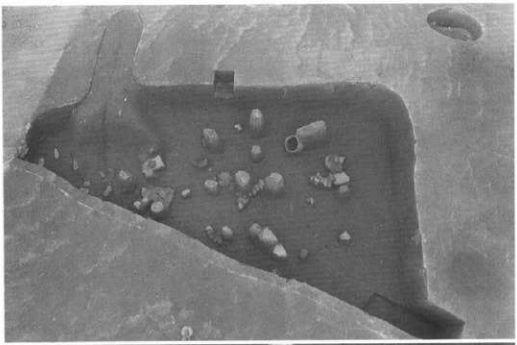


第157号住居址完掘状況
（東から）

第157号住居址カマド
（東から）

第158号住居址完掘状況
（西から）

第158号住居址出土状況
(カマド周辺　西から)



第158号住居址出土状況
(カマド周辺)

第158号住居址完掘状況
(カマド周辺)

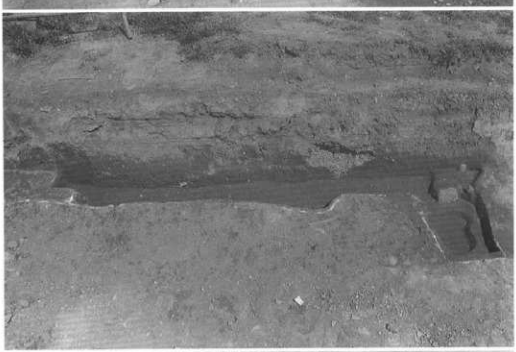
第166号住居址完掘状況
（西から）

第167・168・169号
住居址完掘状況
（南から）

第170号住居址完掘状況
（南から）

第176号住居址出土状況
（南から）

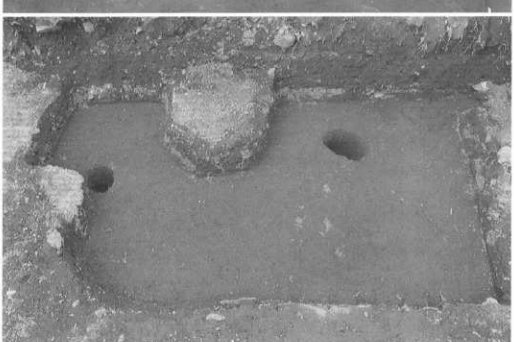
第178号住居址完掘状況
（南から）



第179号住居址完掘状況
（西から）

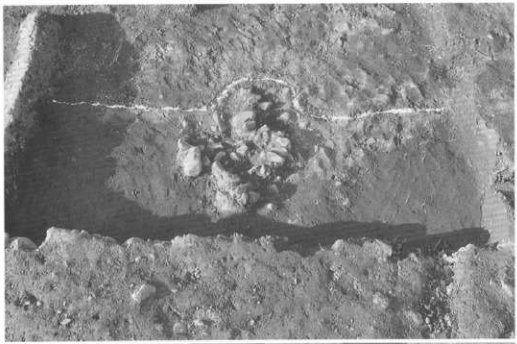
第180号住居跡完掘状況
（西から）

第187号住居址完掘状況
（東から）



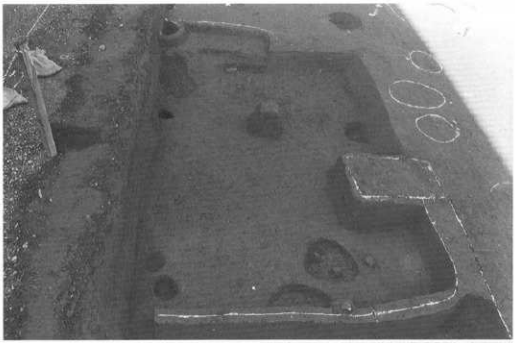
第190号住居址完掘状況
（南から）

第191号住居址完掘状況
（南から）

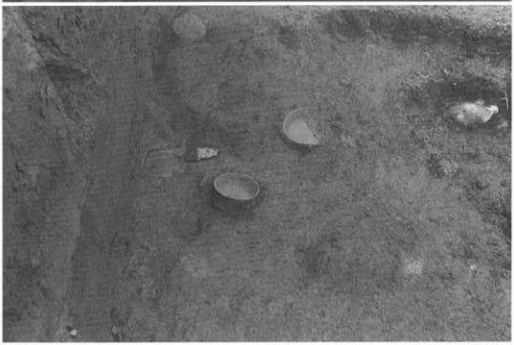


第192号住居址完掘状況
（東から）

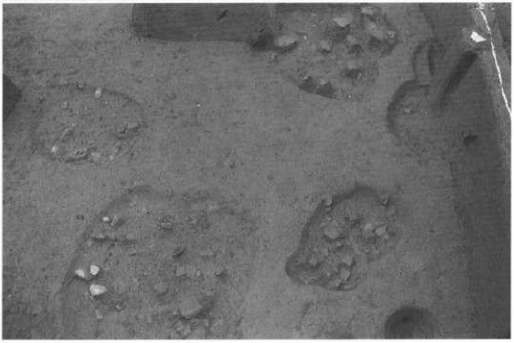
第193号住居址完掘状況
（北から）



第277号住居址完掘状況
（東から）



第277号住居址完掘状況
（カマド周辺　東から）

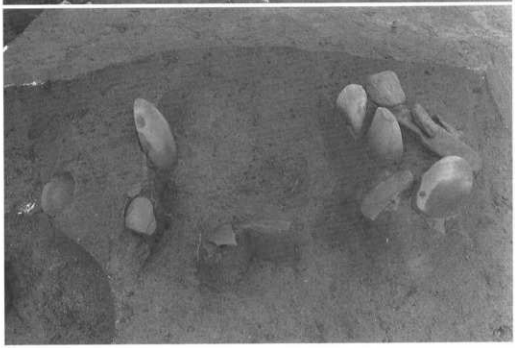


第277号住居址出土状況
（床面ピット　南から）

第263号住居址出土状況
(東から)

第282号住居址完掘状況
(東から)

第282号住居址カマド
(東から)



第285号住居址完掘状況
（東から）

第291号住居址完掘状況
（東から）

第292号住居址完掘状況
（東から）

第297号住居址完掘状況
(西から)

第297号住居址出土状況
(西から)

第297号住居址カマド
(西から)

第297号住居址カマド
（袖芯材の土器　西から）

第298号住居址完掘状況
（東から）

第300号住居址完掘状況
（東から）

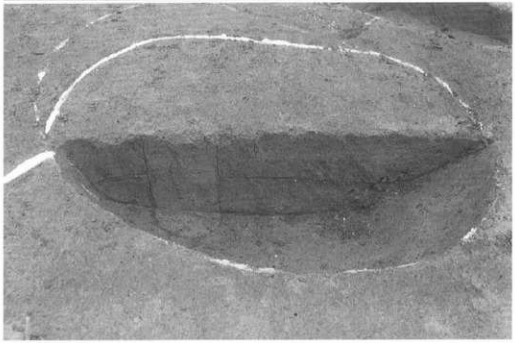
第303号住居址完掘状況
（東から）

第305号住居址完掘状況
（東から）

溝址１完掘状況
（北から）

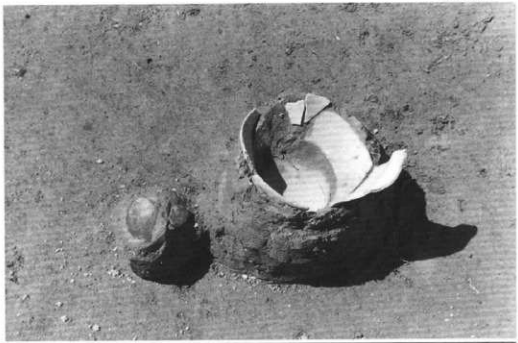
溝址１出土状況
（南側　東から）

第１号建物址
（西から）



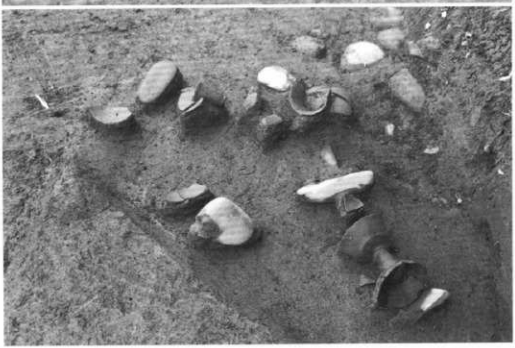
第１号建物址柱痕状況
（P2　北から）

第２検出面
建物集中出土地点１



第２検出面
建物集中出土地点２

第２検出面
建物集中出土地点２



192

68

108

168

105

3

102

163

36

37

35

2

123

76

219

219

219

218

265

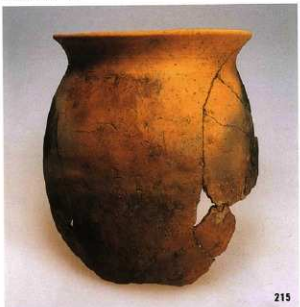
266

271

270

268

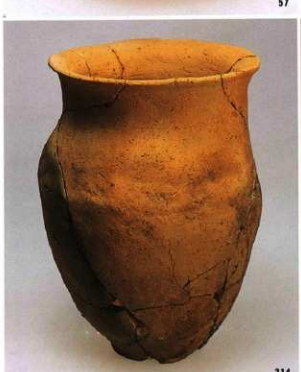
267


215

61

57

213


214

60

出川南遺跡Ⅷ緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわみなみいせき8きんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市出川南遺跡Ⅷ緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№157
編著者名	田多井用章
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620　長野県松本市丸の内３番７号 （記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823　松本市中山3738-１・TEL0263-86-4710）
発行年月日	平成12（2000）年3月24日　（平成11年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
出川（いでがわ）南	長野県（ながのけん） 松本市（まつもとし） 芳野（よしの）	20202	177	36度 12分 12秒	137度 58分 02秒	19990726～ 19991130	3,467	県営住宅南松本団地建替事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出川南	集落址	古墳～平安	竪穴住居址　48軒 掘立柱建物址　1棟 溝　1条 土坑　144基 自然流路　2条	土器・陶器 （土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器） 鉄器	古墳時代後期から平安時代前期の集落址を確認した。

松本市文化財調査報告　№157
長野県松本市
出川南遺跡Ⅷ
― 緊急発掘調査報告書 ―
発行日　平成12年３月24日
発行者　松本市教育委員会
〒390-8620
長野県松本市丸の内３番７号
印　刷　アサカワ印刷株式会社